

第5章 50代就業者のキャリアの描像②

－ライフライン法のキャリア形成支援ツールに向けた検討

1. 本章の目的

本調査で用いたライフライン法は、現在まで、キャリアガイダンス・キャリアカウンセリングの実践場面での活用が先行している手法である。

ただし、従来からライフライン法は回答者が描いた曲線の全体の形状を、自分自身で、もしくはカウンセラーなどの他者が、おおむね印象に基づいて判断して使用することが多かった。そのため、回答者が描いた曲線が何を意味するのか、また、それをどのように解釈すべきなのかについて何らかの実証的な根拠を探ろうとした研究例はほとんど見られなかった。言わばライフライン法ほど、キャリアガイダンスの1つの技法として広く知られ普及しながら、その解釈や分析の方法が実証的に検証されていない手法はないと言える状況がある。

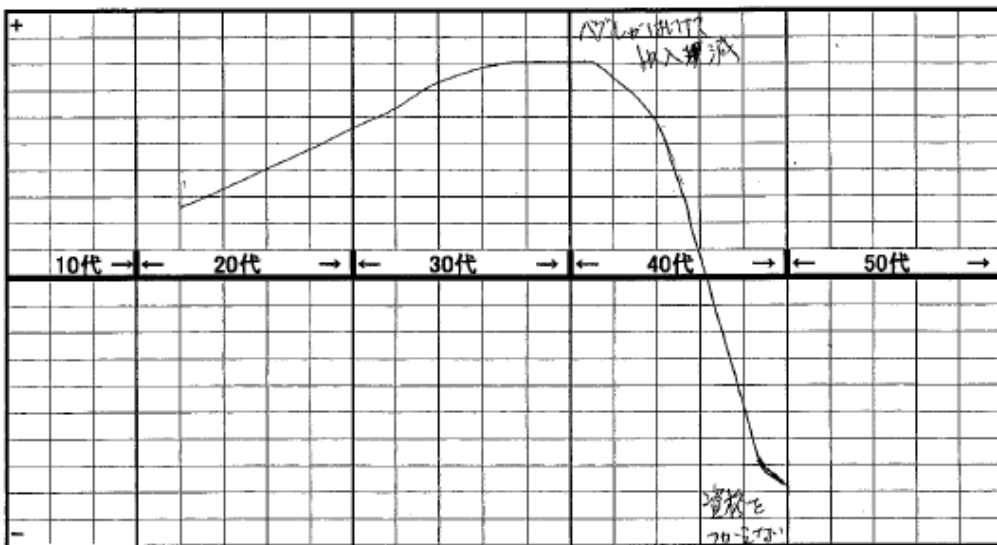
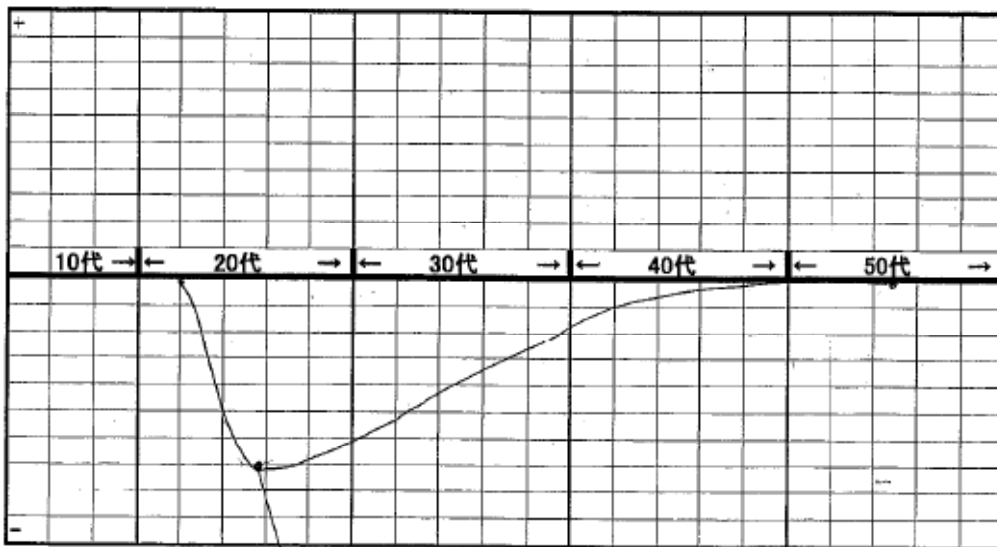
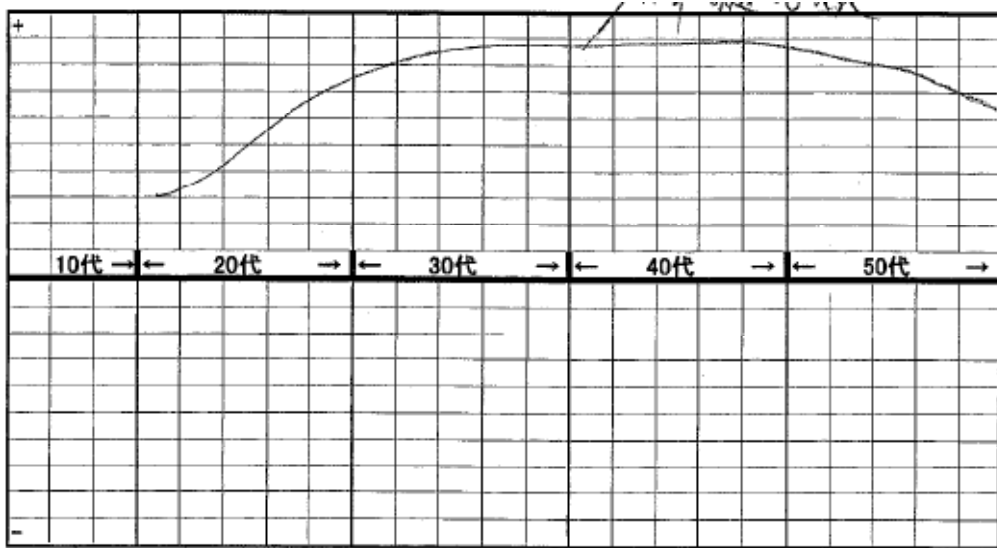
本研究では、最終的な目的として、ライフライン法を、成人キャリアガイダンスにおけるツールもしくは技法としてより精緻化したいと考えた。具体的には、ライフライン法で各人が描いた曲線の特徴づけるいくつかの指標を開発し、それら指標がいかなる意味をもち、いかに解釈すべきなのかについて実証的に検討することとした。前章では、ライフライン法の曲線を年代別の評定値に置き換えて統計的に分析したが、本章では、ライフライン法の曲線を全体的な形状から判断する際の根拠ともなる実証的な知見を集積することを目的とする。

2. ライフライン法の解釈にあたって本研究で着目する指標

ライフライン法の解釈にあたって本研究で着目する指標として、本研究で以下に示す「全般的な線の位置」「最終的な線の位置」「曲線の波形」「屈曲点の数」「最高点・最低点およびその年齢」の5個の指標を検討することとした。

(1) 全般的な線の位置

ライフライン法の曲線が全体としてプラスの領域に位置しているのか、マイナスの領域に位置しているのかを指標化した。例えば、図表5-1上では、回答者が描いた曲線が全体的にプラスの領域に位置していることが分かる。それに対して、図表5-1中では、回答者が描いた曲線が全体的にマイナスの領域に位置していることが分かる。こうした全体の線の位置は、回答者本人の自らの職業生活に対する評価を全体的に表すものであると考え、指標の1つとした。なお、「プラス領域」「マイナス領域」に区別しにくいものについては「中間的」として指標化した。また、図表6-27下のようにプラス領域とマイナス領域の2つの領域にまたがっている場合にはプラス領域とマイナス領域の面積を比較した。面積も同程度の場合には、やはり「中間的」とした。



図表5-1 ライフライン法による回答例①

(2)最終的な線の位置

全般的な線の位置とともに、最終的に線がプラス領域とマイナス領域のどちらで終わっているかも指標とした。本研究のライフライン法では過去から現在までのキャリアを曲線で描いてもらっているため、線がどこで終わっているかは、現時点の自らのキャリアに対する総合的な満足感などの意識が反映されるものと考えて、指標の1つとした。例えば、図表5-1上はプラス領域で終わっているため「プラス」とした。図表5-1中は0付近で終わっているため「中間的」とした。図表5-1下はマイナスで終わっているため「マイナス」とした。

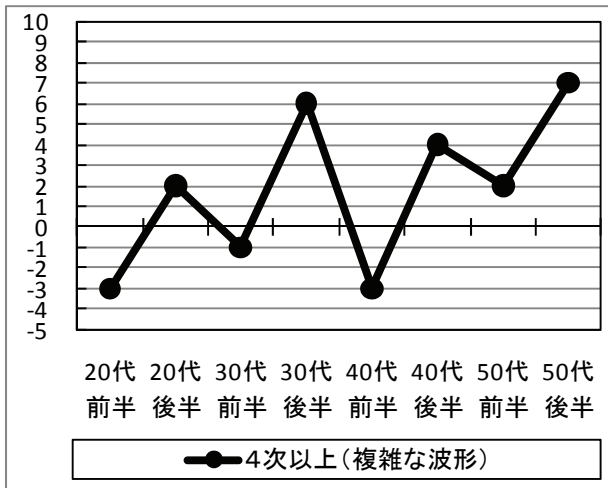
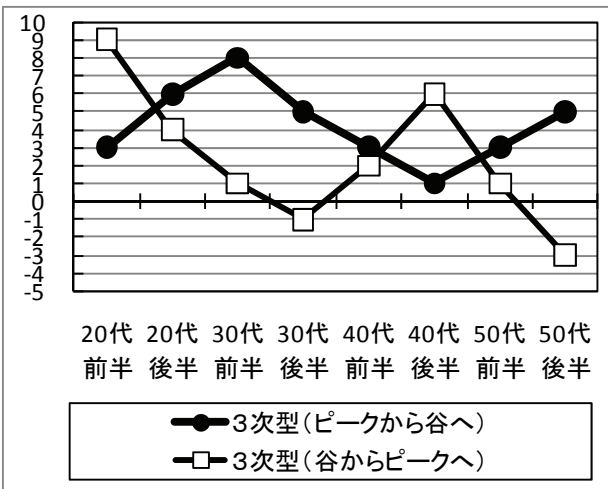
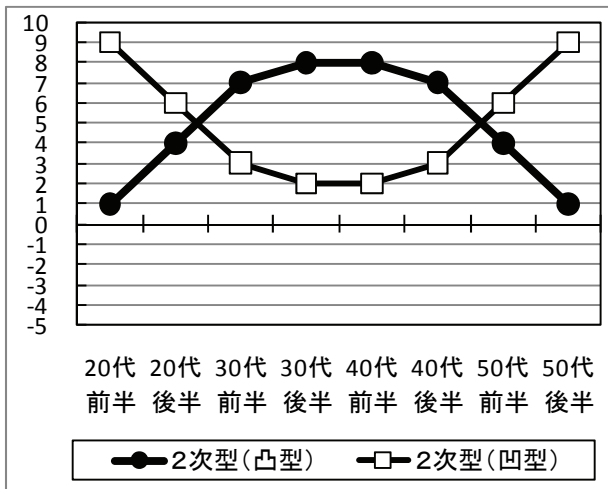
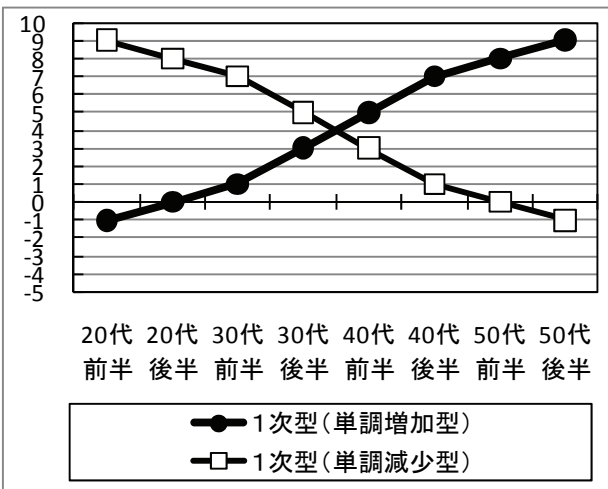
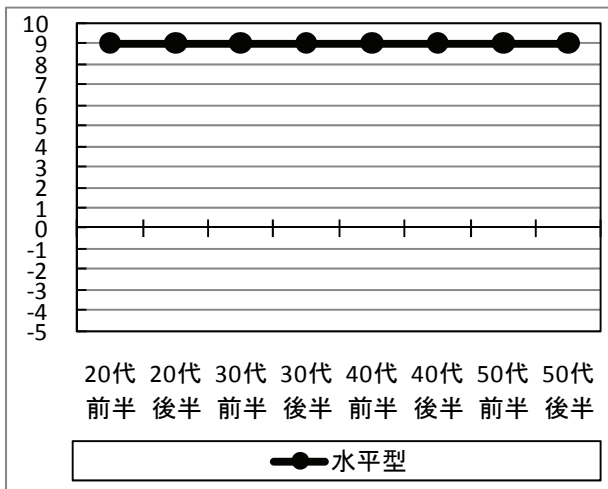
(3)曲線の波形

本研究では、回答者が描いた曲線の「波形」という指標を定義しようと考えた。例えば、回答者によってはまったく屈曲点がなく、水平の線を描く者がいる。また、若い頃を0付近に評定し、年をとるにしたがって上昇するという単調増加の直線を描く者がいる。また、ある年代をピークとする凸型の曲線を描く者もいれば、逆にある年代を谷とする凹型の曲線を描く者もいる。また、本章で見てきたような30代をピークとし、40代を谷として再度上昇するようなS字型の曲線を描く者もいる。さらには、より複雑なジグザグの形状を描く回答者もいる。これを、本研究では図表5-2のようにいくつかの波形として整理した。

ライフライン法で描かれた曲線をみた印象から判定できる指標を開発することが目的であるので、波形の判別がすぐにつくものに限定した。すなわち、①「水平型」は横に1本線が引かれているタイプのもの、②「1次型」は単調増加しているか、単調減少しているかで、屈曲点がほとんど観察されないもの、③「2次型」は1つだけ屈曲点が観察され凸型か凹型のもの、④「3次型」は2つ屈曲点が観察されるピークと谷がそれぞれ1個ずつのもの、④「4次型」はそれ以上の複雑な波形のものとした。

(4)屈曲点の数

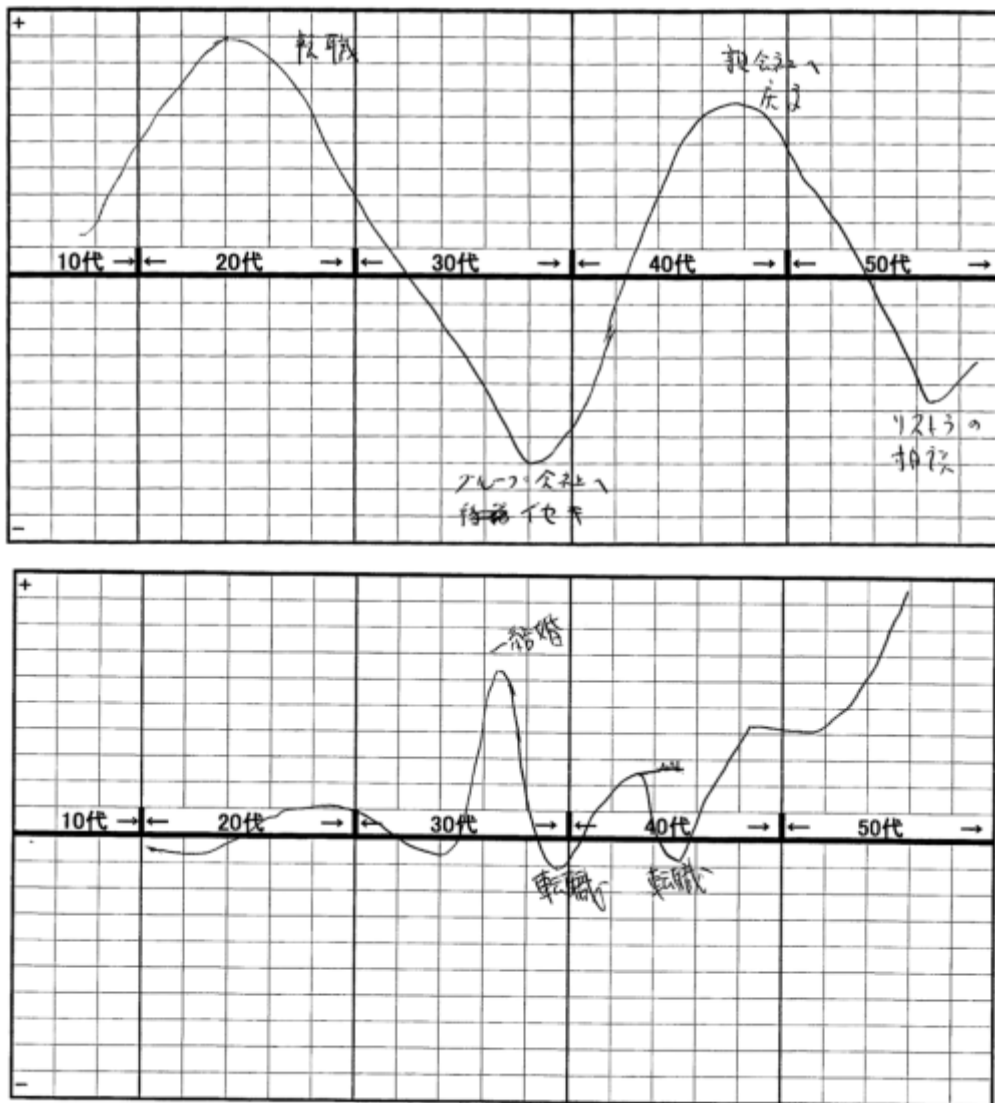
曲線の波形をより厳密にみた場合、回答者が描いた曲線で何回、折れ曲がりが見られるかを数え上げることができる。そこで、この折れ曲がりの回数を屈曲点の数として指標とした。例えば、図表5-3上に示した回答例では、はっきりとした屈曲点が4個観察される。これは回答者が自分の職業生活において4回、大きな転換点があったと認識していることを示す。同様に、図表5-3下ではかなりの数の屈曲点が観察される。これは回答者が自分の職業生活において多くの転換点があったと考えていることを示す。このように屈曲点の数は、本人が自らの職業生活に転機がどの程度あったかを示す指標として考えることができる。屈曲点の数をできるだけ細かく数えることとした。ただし、曲がっているのかいないのか判別がつかない場合もあり、屈曲点の数は精密な指標というよりは、むしろ概数として数えられるべき指標であるとしておきたい。



図表5-2 ライフライン法で描かれた曲線の波形の例

(5) 最高点・最低点およびその年齢

回答者が描いた曲線で最高値・最低値がそれぞれ何点と評定されたかを指標とした。また、最高点・最低点が記録された年齢も指標とした。例えば、図表5-3上の回答者では「最高点」の値は「9」でその年齢は「24歳」、「最低点」の値は「-7」でその年齢は「38歳」として指標化した。



図表5-3 ライフライン法による回答例②

以上、本研究では「全般的な線の位置」「最終的な線の位置」「曲線の波形」「屈曲点の数」「最高点・最低点およびその年齢」の5個の指標を取り上げ、検討することとした。

3. 各指標の基礎統計量

(1) 各指標の度数、平均値、SD等

図表5-4に、「全般的な線の位置」「最終的な線の位置」「屈曲点の数」「曲線の波形」「最高点・最低点およびその年齢」の5個の指標の度数、平均値、SD等を示した。

「全般的な線の位置」は、約8割の回答者が「プラス」であり、「プラスマイナス0」は約2割、「マイナス」はほとんどいなかった。

「最終的な線の位置」は約7割の回答者が「プラス」であり、「0付近」と「マイナス」がそれぞれ15%であった。

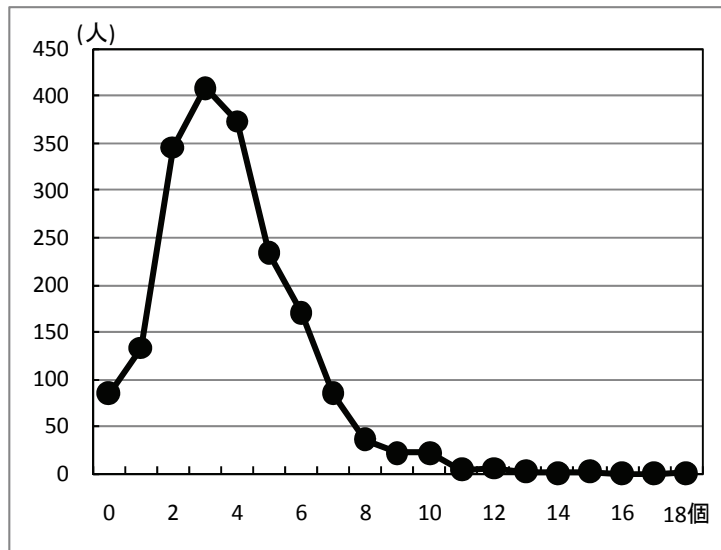
「曲線の波形」については、屈曲点の全くない水平型と1次型が約10%、2次型と3次型が約20%、4次以上型で30%強となっていた。波形が複雑になるにつれて割合が増えていた。

また、屈曲点の数は平均約4個、最高点の年齢は約40歳で平均の評定値は約7、最低点の年齢は平均39歳で平均の評定値は-2であった。

図表5-4 各指標の度数、平均値、SD等

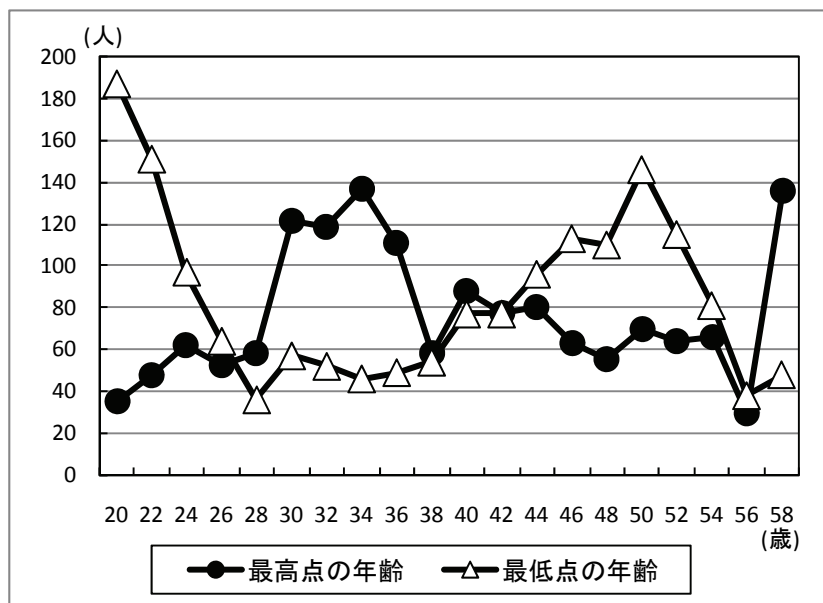
全般的な線の位置					
マイナス	32	1.7%			
プラスマイナス0	417	21.6%			
プラス	1482	76.7%			
合計	1931	100.0%			
最終的な線の位置					
マイナス	304	15.7%			
0付近	280	14.5%			
プラス	1347	69.8%			
合計	1931	100.0%			
曲線の波形					
水平型	185	9.6%			
1次型	254	13.2%			
2次型	379	19.6%			
3次型	442	22.9%			
4次以上型	669	34.7%			
合計	1929	100.0%			
	度数	最小値	最大値	平均値	SD
屈曲点の数	1932	0個	18個	3.75個	2.17
最高点の年齢	1532	18歳	59歳	39.6歳	10.82
最高点の評定値	1932	-7	10	7.27	1.98
最低点の年齢	1764	18歳	59歳	38.6歳	12.72
最低点の評定値	1933	-10	9	-2.23	3.99

図表5-5には屈曲点の数の度数分布を示した。最も頻度が多かったのは「3個」で、以下、「4個」「2個」と続いている。ライフライン法による曲線はおおむね3~4個の屈曲点をもつのが標準的であると考えておくことができる。



図表5-5 「屈曲点の数」の度数分布

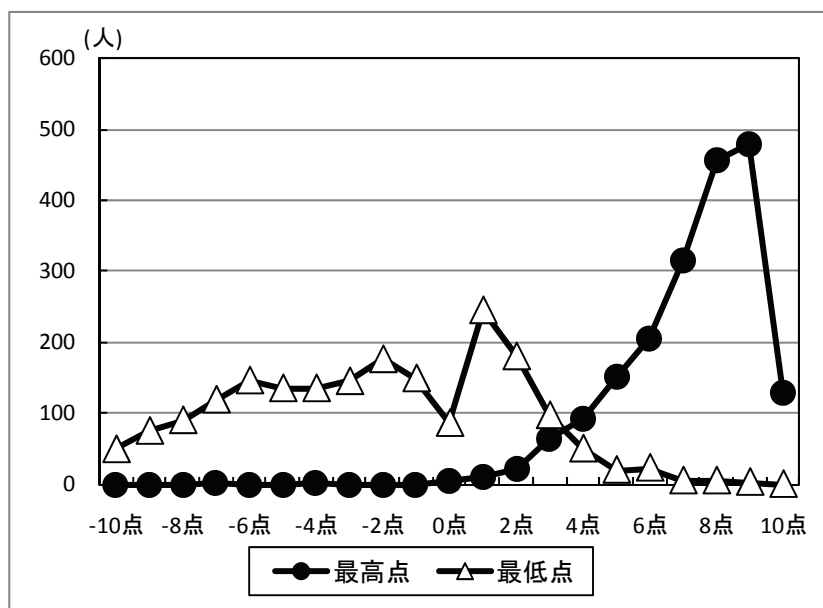
図表5-6には、最高点の年齢と最低点の年齢の分布を示したものである。図表5-6から、ライフライン法で描かれた曲線の最高点がみられる年代としてもっとも多いのは「34歳」を中心とする30代であり、それ以外では「58歳」であることが分かる。これは、職業生活の終盤に向けて一直線に単調増加の線を引き回答者が一定数存在していることによる。その場合、「58歳」という年齢に意味があるというよりは、むしろ、若年から中年そして職業生活の終盤にむけて、職業生活はどんどん上昇してきたという本人の意識を表すものと解釈されるであろう。そのような意識をもたない場合、一般的には30代に職業生活上の最高点が観察されることが多い。



図表5-6 「最高点の年齢」および「最低点の年齢」の度数分布

一方で、最低点は「20歳」を中心とした20代か、そうでなければ「50歳」を中心とした50代にみられる。20代に最低点が集中するのは、職業生活の初期段階であり、学校からの移行過程で職業生活に慣れるまでの間を低く評価する傾向があるためと推測される。また、上で述べた職業生活の開始から終盤に向けて一直線の単調増加の線を引く回答者は一定数存在しており、そうした回答者では自ずと20代に最低点が観察されることとなる。一方、「50歳」で最低点がみられる場合というのは、本章でみてきたとおり、30代をピーク、40代から50代を谷とするS字曲線が観察されるためである。

図表5-7には、最高点と最低点の分布を示した。グラフの形状は極めて対照的であり、最高点が満点の10点の方につまった分布になっているのに対して、最低点は-10点～3点ぐらいまでにかけて、ほぼ均等に分布している。すなわち、自らの職業生活の最高点は8点や9点など満点に近く評定する回答者が多い一方、最低点については回答者によって、その評価が様々であるということが言える。先に示したとおり、全般的な線の位置や最終的な線の位置もプラス領域に偏っていたことが、基本的に今回のライフライン法では回答者はプラス方向に曲線を偏らせることが多かった。ここでも、その影響から最高点が上につまった分布になったものと考察される。



図表5-7 「最高点」および「最低点」の数の度数分布

(2) 各指標間の相関係数および各年代別評定値との相関係数

図表5-8には各指標の相関係数を示した。最も相関係数が高かったのは「波形」と「屈曲点」の数であり、波形が水平型から1次型、2次型と複雑になるにつれて、当然ながら屈曲点の数も多いことが示された。また、「全般的な線の位置」は「最終的な線の位置」との間に大きな相関係数が観察されたが、同時に「最低点の評定値」との間にも比較的大きな相関係数がみられた。すなわち、全般的な線の位置がプラスであれば最終的な線の位置もプラ

スであることが多いが、同時に、最低点の水準もそれほど低くないということが言える。また「最終的な線の位置」は「最低点の年齢」および「最低点の評定値」と相関が高かった。最終的な線の位置がプラスであれば、最低点を記録する年齢は若く、その水準もあまり低くないということが言える。さらに、「最低点の評定値」は「曲線の波形」「最低点の年齢」と関連しており、最低点の評定値が大きいほど、曲線の波形はシンプルであり、最低点の年齢は若いという関係がみられた。

図表5-8 各指標間の相関係数

	全般的な線の位置	最終的な線の位置	曲線の波形	屈曲点の数	最高点の年齢	最高点の評定値	最低点の年齢	最低点の評定値
全般的な線の位置								
最終的な線の位置	.407							
曲線の波形	-.155	-.041						
屈曲点の数	-.085	-.012	.626					
最高点の年齢	.199	.239	-.116	-.094				
最高点の評定値	.170	.108	.148	.086	-.008			
最低点の年齢	-.213	-.491	.229	.135	-.221	-.002		
最低点の評定値	.491	.376	-.426	-.282	.235	-.074	-.420	

※順位相関係数。100以上の相関係数は全て1%水準で有意。

※.300以上の相関係数に網かけを付した。

図表5-9には、各年代別評定値との相関係数を示した。「全般的な線の位置」は30代以降の評定値と関連が強かった。「最終的な線の位置」は、回答者の現在の年齢である50代に近くなるほど関連が強くなっていた。「曲線の波形」および「屈曲点の数」は年代別の評定値とは強い相関があまりみられなかった。「最高点の年齢」は年齢が高ければ高いほど、20代の頃の評定値と負の相関がみられ、40代以降の評定値と正の相関がみられた。これはピークを迎えた年齢が上であるほど20代の評定値は低く、40代以降の評定値は高いということであり、指標の意味からいって当然の結果となっている。同様のことは「最低点の年齢」でも言うことができ、谷になっている年代が上であるほど40代以降の評定値は低いという結果であった。「最高点の評定値」「最低点の評定値」ともに値が高いほど、各年代の評定値も高いことが示されたが、最高値は30代の値と最低値は40代以降の値と特に相関が強いのが特徴であった。

図表5-9 各年代の評定値と各指標との相関係数

	20代前半	20代後半	30代前半	30代後半	40代前半	40代後半	50代前半	50代後半
全般的な線の位置	.147	.179	.238	.318	.440	.474	.416	.409
最終的な線の位置	.081	.013	-.019	.042	.161	.294	.624	.728
曲線の波形	-.006	-.010	-.060	-.119	-.175	-.193	-.142	-.101
屈曲点の数	-.019	-.041	-.065	-.082	-.073	-.094	-.080	-.054
最高点の年齢	-.324	-.327	-.162	.082	.326	.368	.373	.400
最高点の評定値	.243	.371	.479	.474	.325	.272	.266	.316
最低点の年齢	.122	.133	.116	.035	-.173	-.386	-.574	-.532
最低点の評定値	.114	.083	.105	.193	.375	.472	.444	.383

※順位相関係数。絶対値が.080以上の相関係数は全て1%水準で有意。

※.300以上の相関係数に網かけを付した。

(3)各年代の評定値の平均・標準偏差と各指標との相関係数

次に、各年代の評定値の平均および標準偏差を求め、その値と各指標との相関係数を求めて検討を行った。各年代の評定値の平均を求めるとは、「20代前半」から「50代後半」に至る評定値がだいたい平均していただいどの程度の水準にあるのかを示す指標となる。これは、当然ながら、ここで検討している「全般的な線の位置」の指標と関連することが期待される。また、各年代の評定値の平均が高ければ全般的に線が高い位置にあるということなので、「最高点の評定値」および「最低点の評定値」との関連も予測される。一方で、各年代の評定値の標準偏差を求めるとは、その回答者の評定値がどの程度、高低で変動しているかを示す。

図表5-10の結果から、「20代から50代までの平均値」ともっとも大きな相関係数がみられたのは「全般的な線の位置」であり、次に大きな相関係数がみられたのは「最低点の評定値」であった。これらは指標の意味から考えて、然るべき相関関係がみられたものと考ええる。また、「20代から50代までの標準偏差」ともっとも大きな相関係数がみられたのは「最低点の評定値」であった。この結果から、20代から50代に至るまでの評定値の散らばりぐあいが大きいということは、要するに最低点の評価値が極端に低いということであるという見方ができる。言い換えると、自分のこれまでの職業生活上の危機やネガティブな出来事に対する評価がマイナスであればあるほど、ライフラインの曲線の形状は起伏に富んだものになる。「最高点の評定値」にもそれなりの相関係数がみられているが、「最低点の評定値」との間に-.808もの大きな相関係数が観察されたことは特に強調すべき結果である。

図表5-10 各年代の評定値の平均・標準偏差と各指標との相関係数

	20代から 50代までの 平均	20代から 50代までの 標準偏差
全般的な線の位置	.650	-.380
最終的な線の位置	.432	-.349
曲線の波形	-.231	.381
屈曲点の数	-.123	.213
最高点の年齢	.241	-.214
最高点の評定値	.461	.376
最低点の年齢	-.329	.387
最低点の評定値	.612	-.808

※順位相関係数。全て1%水準で有意。

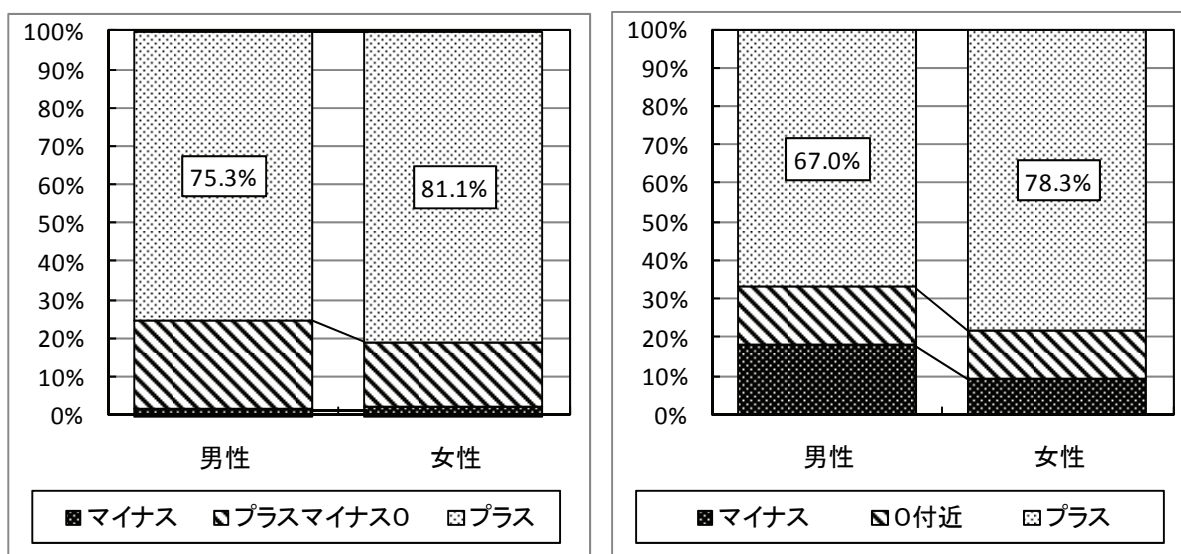
※.300以上の相関係数に網かけを付した。

4. 回答者の属性別にみた各指標の傾向

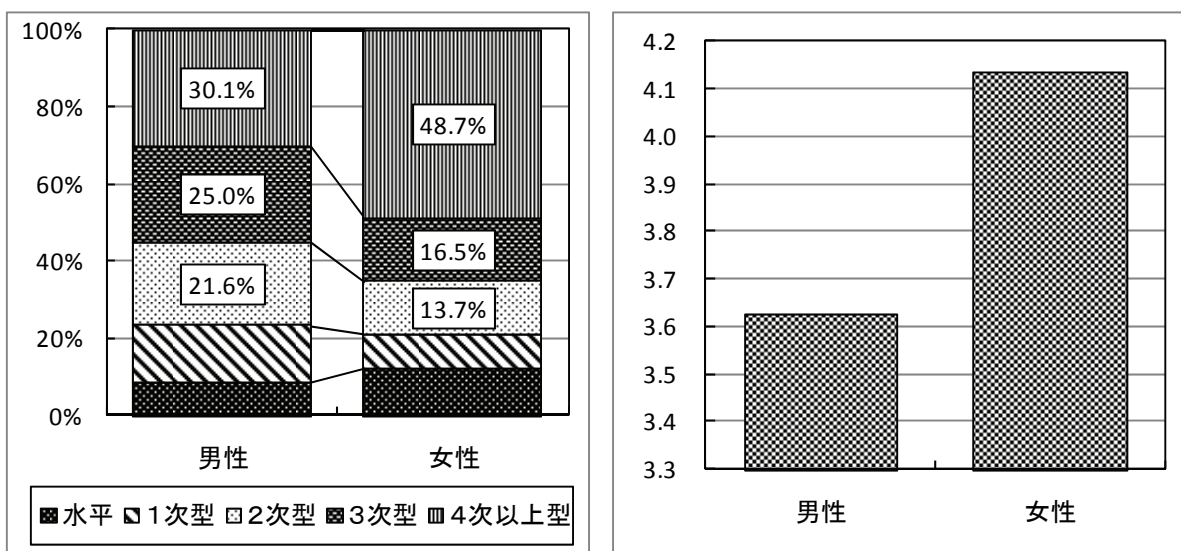
「全般的な線の位置」「最終的な線の位置」「曲線の波形」「屈曲点の数」「最高点・最低点およびその年齢」の各指標と、他の要因との関連について以下に詳しく検討する。

(1) 性別の各指標の傾向

性別に各指標を検討した結果、「全般的な線の位置」と「最終的な線の位置」で統計的に有意な違いがみられた。図表5-11に示したとおり、「全般的な線の位置」および「最終的な線の位置」が「プラス」の者は女性に多かった。



図表5-11 性別にみた「全般的な線の位置」(左)と「最終的な線の位置」(右)



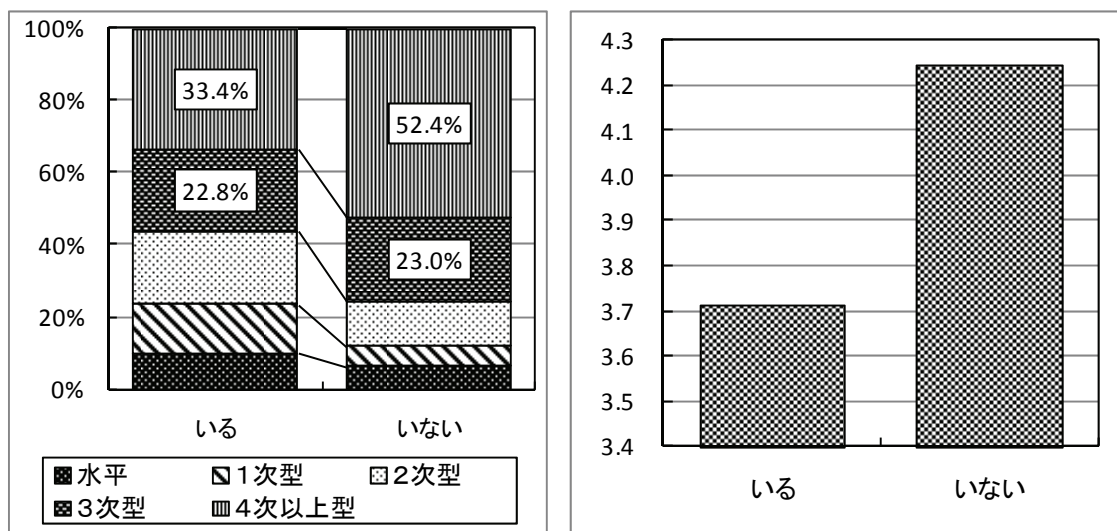
図表5-12 性別にみた「曲線の波形」(左)と「屈曲点の数」(右)

また、「曲線の波形」および「屈曲点の数」にも性別で統計的に有意な違いがみられた。

図表5-12に示したとおり、「4次以上型」の複雑な波形は女性に多く、男性では「1次型」「2次型」「3次型」などのよりシンプルな波形がみられることが多かった。こうした傾向は「屈曲点の数」でも示されており、女性の方が「屈曲点の数」が多かった。

(2) 配偶者の有無別の各指標の傾向

配偶者の有無別に各指標を検討した結果、「曲線の波形」と「屈曲点の数」で統計的に有意な違いがみられた。図表5-13に示したとおり、現在、配偶者がいない者の方が「4次以上型」の複雑な波形を描く割合が多く、かつ「屈曲点の数」も多い曲線であるようであった。

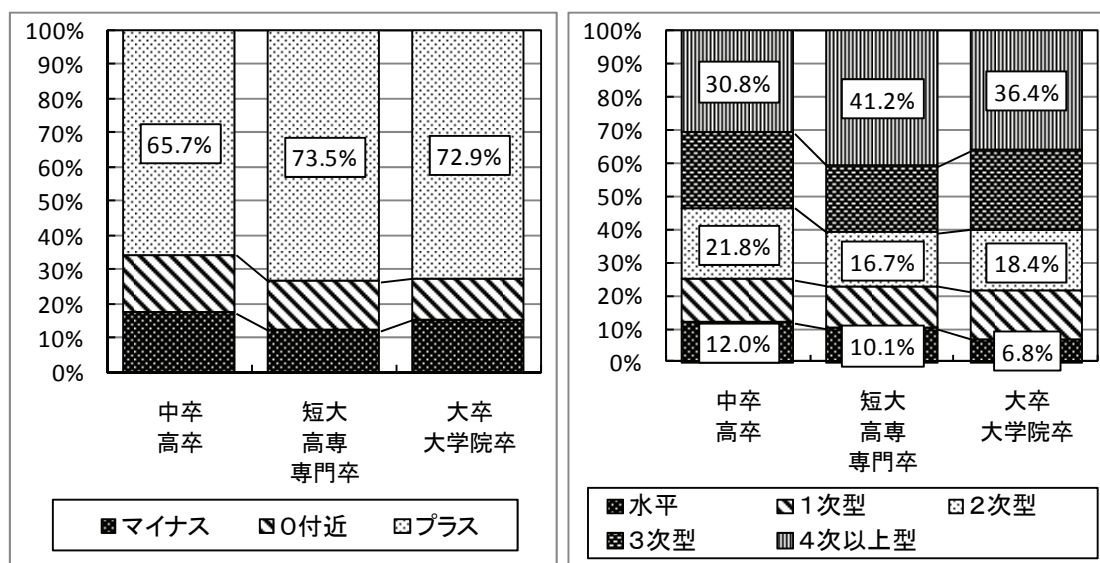


図表5-13 配偶者の有無別にみた「曲線の波形」(左)と「屈曲点の数」(右)

(3) 学歴別の各指標の傾向

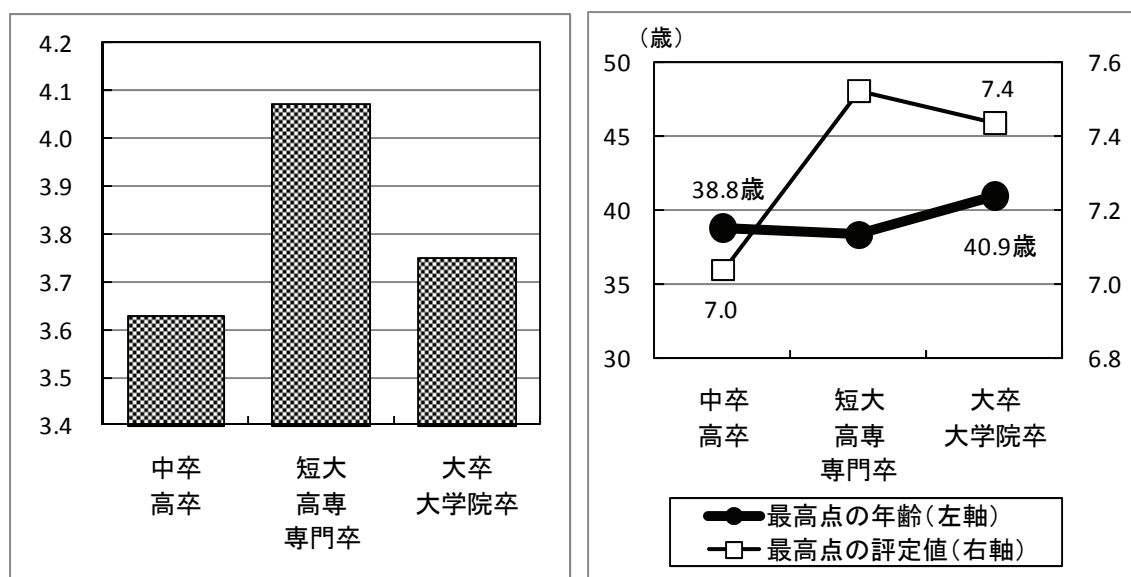
学歴別に各指標を検討した結果、「最終的な線の位置」「曲線の波形」「屈曲点の数」「最高点の年齢・最高点の評定値」で統計的に有意な違いがみられた。図表5-14に示したとおり、「中卒・高卒」の最終学歴をもつ回答者は「最終的な線の位置」がプラスである割合が少なかった。また、「水平型」「2次型」の波形が観察される者が多く、「4次以上型」のような複雑な波形が観察された者は少なかった。

「4次以上型」は相対的に女性が多く含まれる「短大・高専・専門卒」で多かった。また、このことと関連して、図表5-15左に示されるように「短大・高専・専門卒」は「屈曲点の数」も多かった。



図表5-14 学歴別にみた「最終的な線の位置」(左)と「曲線の波形」(右)

なお、「最高点の年齢・最高点の評定値」は「大卒・大学院卒」で年齢と評定値がともに高かった。逆に「中卒・高卒」では年齢と評定値がともに低かった。具体的には、最終学歴が「大卒・大学院卒」の場合、最高点が観察される年齢は平均 40.9 歳であり、その際の最高点は平均 7.4 点であった。それに対して、最終学歴が「中卒・高卒」の場合、最高点が観察される年齢は平均 38.8 歳と早く、その際の最高点は平均 7.0 点と若干低い。まとめると、学歴が高いほど最高点を向かえる年齢が遅く、また最高点の値そのものも高かったことが示される。



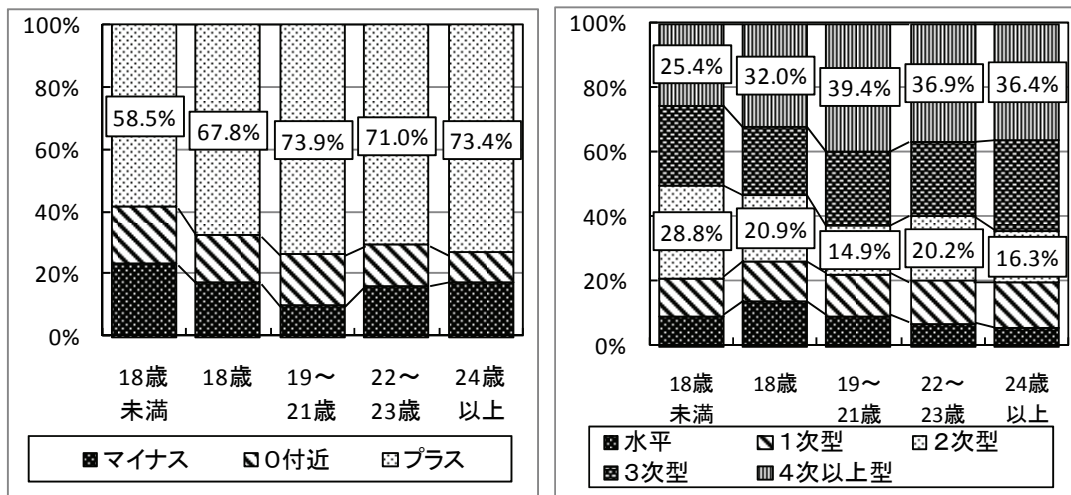
図表5-15 学歴別にみた「屈曲点の数」(左)と「最高点の年齢・最高点の評定値」(右)

5. 最初の勤務先の特徴別の各指標の傾向

(1) 最初に勤め始めた年齢別の各指標の傾向

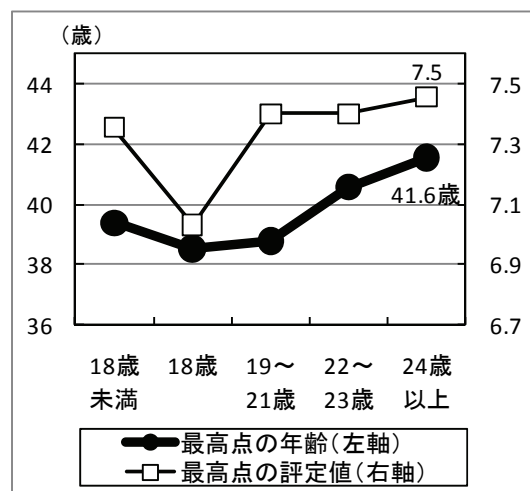
前項の最終学歴に関連して、ここでは最初に勤め始めた年齢別に各指標の傾向を検討した。その結果、最初に勤め始めた年齢によって「最終的な線の位置」「曲線の波形」「最高点の年齢・最高点の評定値」に統計的に有意な違いがみられた。

図表5-16に示したとおり、「18歳未満」で働き始めた回答者は「最終的な線の位置」がプラスの者が少なかった。また、「曲線の波形」は「4次以上型」のような複雑な波形を示す者が少なく、1つのピークがある「2次型」の波形を示す者が多かった。



図表5-16 最初に勤め始めた年齢別にみた「最終的な線の位置」(左)と「曲線の波形」(右)

図表5-17は、最初に勤め始めた年齢別にみた「最高点の年齢・最高点の評定値」を示した。前項の最終学歴別にみた「最高点の年齢・最高点の評定値」と似たような結果となっており、最初に勤め始めた年齢が遅いほど、最高点が観察される年齢も高いようであった。なお、最高点の評定値は「18歳」で最も低かったのが特徴であった。



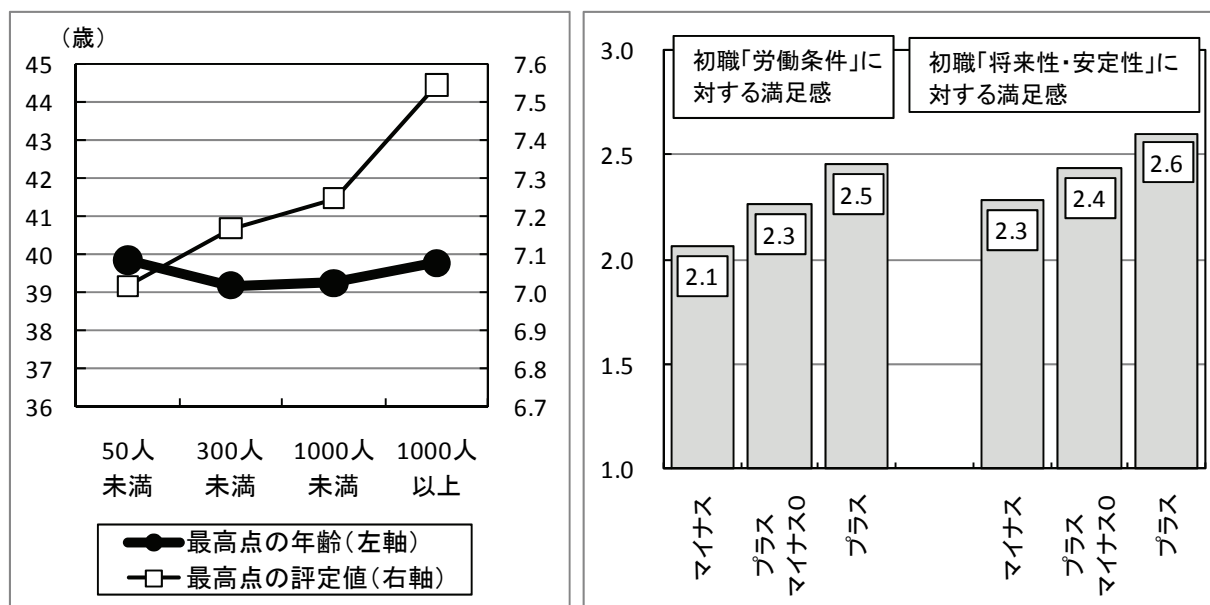
図表5-17 最初に勤め始めた年齢別にみた「最高点の年齢・最高点の評定値」

(2)最初の勤務先の従業員数および満足感別の各指標の傾向

最初の勤務先の従業員数や満足感で各指標の傾向を検討した。その結果、最初の勤務先の従業員数別にみた「最高点の年齢・評定値」、最初の勤務先に対する満足感別にみた「全般的な線の位置」で統計的に有意な顕著な結果がみられた。

図表5-18左に示したとおり、最初の勤務先の従業員数は「最高点の年齢」とは関連がみられなかったが、「最高点の評定値」と関連がみられた。最初の勤務先の従業員数は多い方がその後の「最高点の評定値」の値が大きくなることが示された。

図表5-18右に示したとおり、最初の勤務先の「労働条件」に対する満足感は、「全般的な線の位置」がプラス領域にある回答者で最も高かった。また、最初の勤務先の「労働条件」に対する満足感も同様に、「全般的な線の位置」がプラス領域にある回答者で最も高かった。



図表5-18 最初の勤務先の従業員数別の「最高点の年齢・最高点の評定値」(左)と最初の勤務先に対する満足感別の「全般的な線の位置」(右)

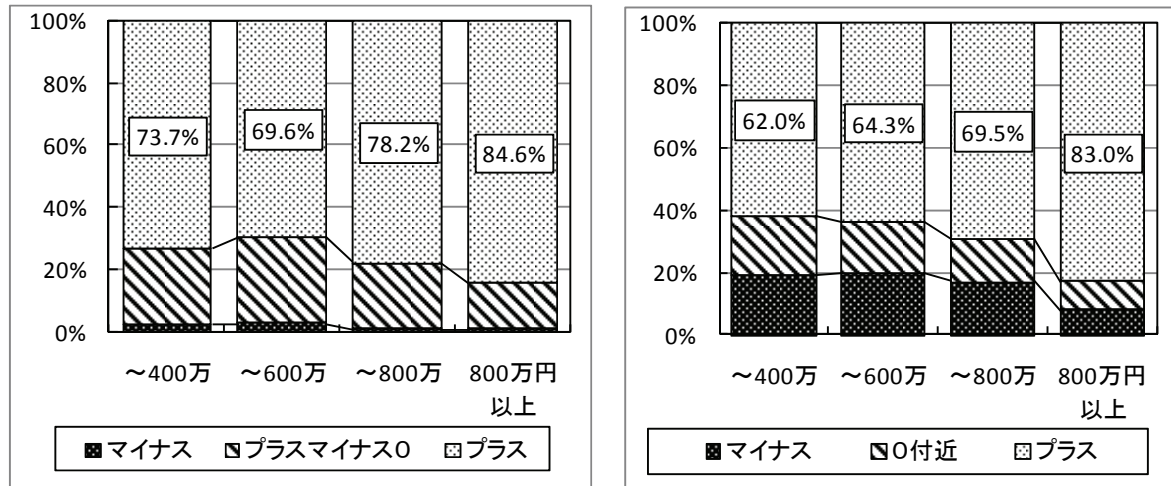
6. 収入別にみた各指標の傾向

回答者の収入別に各指標の傾向を検討した。その結果、「全般的な線の位置」「最終的な線の位置」「曲線の波形」「屈曲点の数」「最高点・最低点の年齢および評定値」で統計的の全ての指標で有意な顕著な結果が示された。

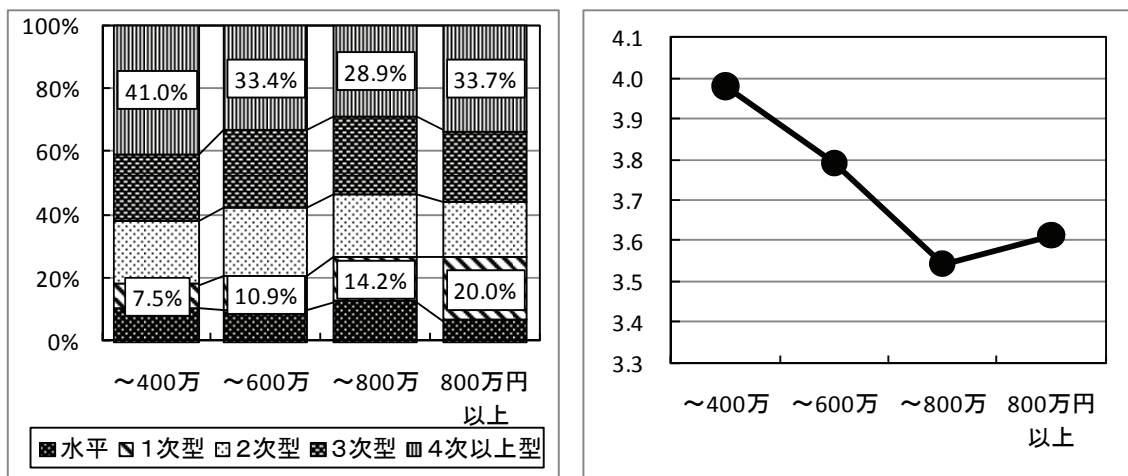
図表5-19に示したとおり、概して、年収が高いほど「全般的な線の位置」はプラス、「最終的な線の位置」もプラスである者が多い。

また、図表5-20左に示した「曲線の波形」については、クロス表の残差分析の結果から、「~400万円」で「4次以上型」の複雑な波形を描く者が多く「1次型」は少なかった。

「600～800万円」で「水平型」、「800万円以上」で「1次型」が多いなどの結果が示されていた。ただし、総じて言えば、図表5-20右の「屈曲点の数」のグラフに示されるとおり、年収が低いほど屈曲点が多い、複雑な曲線を描くようであった。



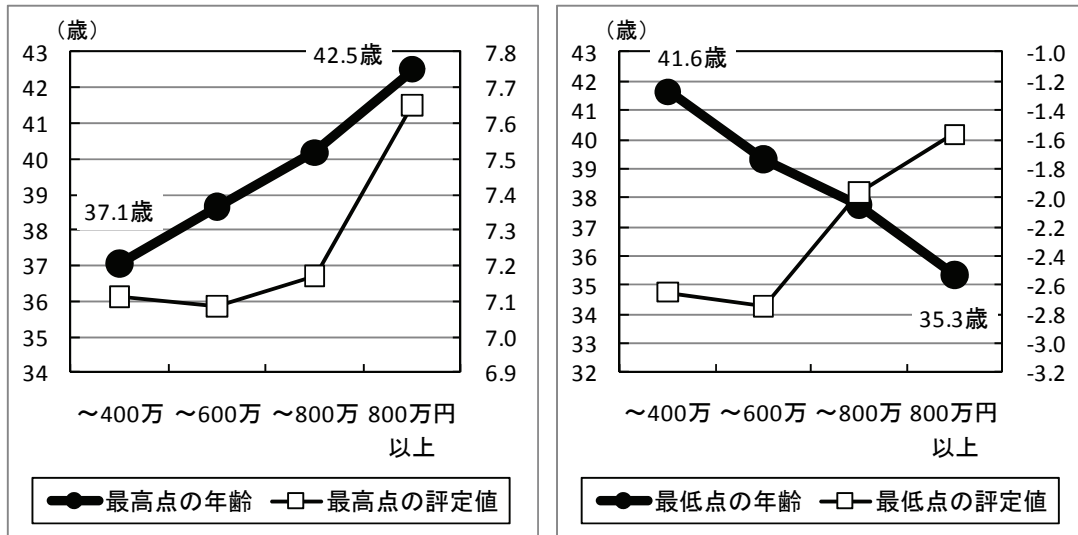
図表5-19 最近1年間の年収(税込み)別にみた「全般的な線の位置」(左)と「最終的な線の位置」(右)



図表5-20 最近1年間の年収(税込み)別にみた「曲線の波形」(左)と「屈曲点の数」(右)

図表5-21には、年収別にみた「最高点の年齢・評定値」「最低点の年齢・評定値」を示した。グラフから、年収が高いほど、最高点が観察される年齢は高く、その評定値も高い。最低点の年齢は低く、その評定値も低いということが分かる。また、年収が「800万円以上」の回答者は、若い頃(平均35.3歳)を最低であったと評定し、その後、ある程度年齢(平均42.5歳)がたってから最高点が観察される。このように、最低点の年齢の方が若く、最高点の年齢が後になっていた。それに対して、年収が「～400万円」の回答者は最高点が37.1歳であり、最低点が41.6歳と、最低点の方が後に来ていた。このように、平均値で比較した場

合、年収の高い回答者と低い回答者では、最高点と最低点が観察される順番がことになっており、どの順番で最高点、最低点が観察されるのかも指標となりうる可能性が示された。



図表5-21 最近1年間の年収(税込み)別にみた
「最高点の年齢・評定値」(左)と「最低点の年齢・評定値」(右)

7. 現在の勤務先属性別にみた各指標の傾向

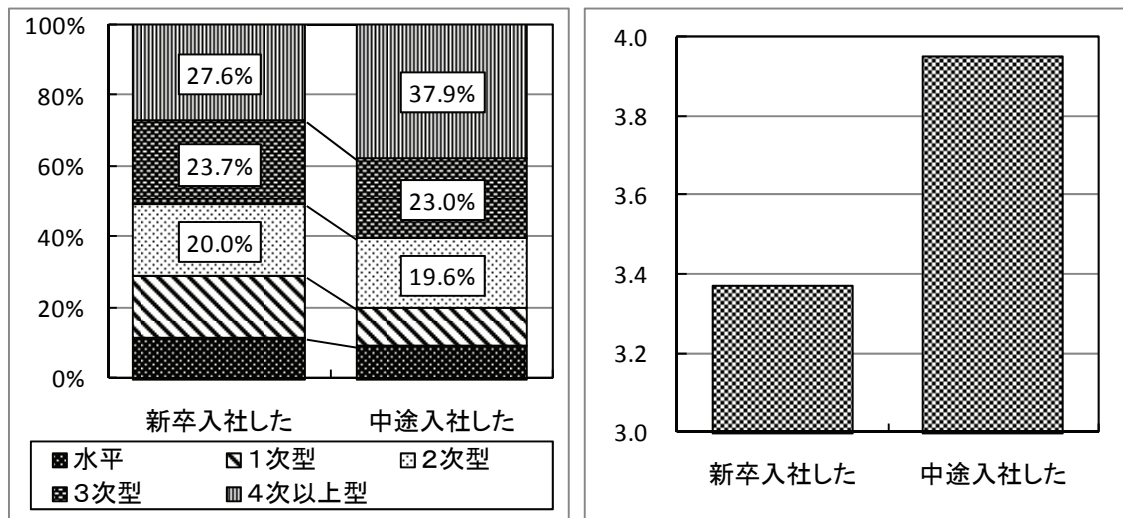
現在の勤務先属性別にみた各指標の傾向を検討するために、以下に、現在の勤務先への入社の経緯、業種、職種、従業員数別に検討を行った。

(1) 現在の勤務先への入社の経緯別の各指標の傾向

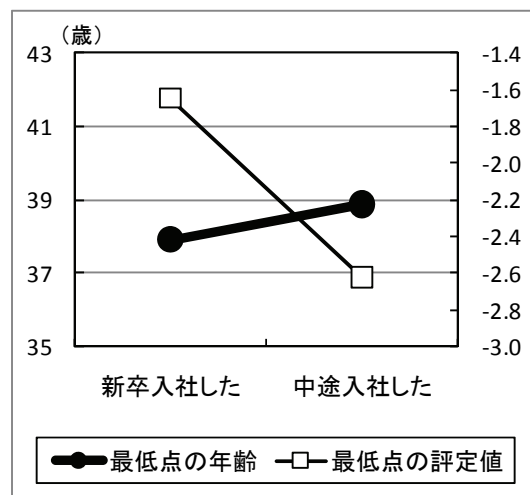
回答者の現在の勤務先への入社の経緯が「新卒入社」「中途入社」別に検討を行った結果、「曲線の波形」「屈曲点の数」「最低点の年齢・評定値」で統計的に有意な顕著な結果がみられた。

図表5-22左に示したとおり、「中途入社した」回答者の方が、「4次以上型」が多く、概して「曲線の波形」が複雑であった。同様に、図表5-22右に示したとおり、「中社した」回答者の方が「屈曲点の数」が多く、曲がる箇所が多い複雑な曲線を描いていたことが分かる。

図表5-23には、入社の経緯別にみた「最低点の年齢・評定値」を示した。最低点がみられる年齢にはあまり違いがないが、「中途入社した」回答者は「最低点の評定値」が「新卒入社した」回答者に比べて低いことが分かる。中途入社した回答者には、中途入社をせざるを得なかったキャリア上の様々な危機を経験した者がおり、そうした危機に対する評価が最低点の評価値に結びついているものと推測される。



図表5-22 現在の勤務先への入社の際の経緯別の「曲線の波形」(左)と「屈曲点の数」(右)



図表5-23 現在の勤務先への入社の際の経緯別の「最高点・最低点の評定値」

(2)現在の勤務先の業種別の各指標の傾向

現在の勤務先の業種別に各指標の傾向を検討した結果、「最終的な線の位置」「曲線の波形」「最高点の年齢」「最低点の評定値」で統計的に有意な顕著な結果がみられた。

図表5-24には、「最終的な線の位置」がプラス領域で終わっている者の割合を、業種別に示した。表から、最もプラス領域で終わる割合が高い業種は「教育、学習支援業」であり、以下、「医療、福祉」「公務」「金融・保険業」と続いているのが分かる。

	プラス 領域
教育、学習支援業	84.8%
医療、福祉	82.1%
公務	81.2%
金融・保険業	78.5%
電気・ガス・熱供給・水道業	76.5%
その他のサービス業	71.4%
運輸業	67.9%
卸売・小売業	67.4%
建設業	64.7%
情報通信業	64.3%
製造業	62.0%

図表5-24 現在の勤務先の業種別の「最終的な線の位置」

図表5-25には、業種別の「曲線の波形」を示した。統計的に有意であった箇所に着目して解釈を行うと、①「製造業」では「水平型」が多く「4次以上型」が少ない、②「卸売・小売業」では「3次型」が多い、③「金融・保険業」では「水平型」「1次型」が少なく、「4次以上型」が多い、④「医療、福祉」では「水平型」が少なく「1次型」が多い、⑤「教育、学習支援業」では「水平型」が多く「2次型」が少ない、⑥「公務」では「1次型」が多く「2次型」が少ない、といった結果がみられた。「教育、学習支援業」「医療、福祉」「公務」「金融・保険業」は、前項でいずれも「最終的な線の位置」がプラス領域である割合が高い職業であったが、そこに至る波形には大きな違いがあることが示される。

表5-25 現在の勤務先の業種別の「曲線の波形」

	建設業	製造業	電気 ガス 熱供給 水道業	情報 通信業	運輸業	卸売小 売業	金融保 険業	医療 福祉	教育 学習 支援業	その他 のサー ビス業	公務	合計
水平	12.4%	11.7%	9.8%	4.3%	5.7%	6.4%	4.1%	12.1%	19.0%	7.7%	12.3%	9.6%
	1.2	2.1	.0	-1.5	-1.4	-1.6	-2.1	1.1	2.9	-1.0	1.1	
1次型	11.8%	12.3%	15.7%	11.4%	9.4%	15.5%	6.6%	10.7%	17.7%	13.8%	22.5%	13.2%
	-.5	-.8	.5	-.4	-1.2	1.0	-2.2	-.9	1.2	.3	3.4	
2次型	19.0%	20.6%	21.6%	20.0%	26.4%	20.9%	23.1%	14.3%	7.6%	21.4%	10.1%	19.6%
	-.2	.7	.4	.1	1.8	.5	1.0	-1.6	-2.7	.7	-2.9	
3次型	22.9%	24.9%	29.4%	22.9%	17.9%	28.9%	22.3%	15.0%	19.0%	24.0%	18.1%	22.9%
	.0	1.4	1.1	.0	-1.2	2.1	-.2	-2.3	-.8	.4	-1.4	
4次以上型	34.0%	30.6%	23.5%	41.4%	40.6%	28.3%	43.8%	47.9%	36.7%	33.2%	37.0%	34.7%
	-.2	-2.5	-1.7	1.2	1.3	-1.9	2.2	3.4	.4	-.5	.6	
合計	153	579	51	70	106	187	121	140	79	196	138	1923

※上段は%、下段は標準化済み残差。絶対値が1.96以上の場合、5%水準で統計的に有意。網掛けを付した。

図表5-26左には「最高点の年齢」が高い業種から順に並べた。また、図表5-26右には「最低点の評定値」が高い業種から順に並べた。両者ともに傾向は似ており、「教育、学習支援業」「公務」で最高点の年齢および最低点の評定値のいずれも高いことが示される。その他には、「その他のサービス業」が最高点の年齢を迎えるのが早い一方で、「最低点の

評定値」が比較的高いことが特徴的な結果であった。

**図表5-26 現在の勤務先の業種別の
「最高点の年齢」(左)と「最低点の評定値」(右)**

	最高点の 年齢		最低点の 評定値
教育、学習支援業	45.2歳	教育、学習支援業	-0.80
公務	42.8歳	公務	-1.46
卸売・小売業	40.8歳	医療、福祉	-1.54
電気・ガス・熱供給・水道業	40.7歳	その他のサービス業	-2.24
医療、福祉	40.7歳	電気・ガス・熱供給・水道業	-2.27
運輸業	40.6歳	卸売・小売業	-2.36
金融・保険業	40.3歳	情報通信業	-2.37
情報通信業	39.4歳	製造業	-2.37
製造業	38.9歳	金融・保険業	-2.47
その他のサービス業	38.0歳	運輸業	-2.69
建設業	37.0歳	建設業	-2.93

(3)現在の職業別の各指標の傾向

現在の職業別に各指標の傾向を検討した結果、「全般的な線の位置」「最終的な線の位置」「曲線の波形」「最高点の年齢・評定値」「最低点の年齢・評定値」で統計的に有意な顕著な結果がみられた。

図表5-27には「全般的な線の位置」および「最終的な線の位置」がプラス領域である者の割合を、業種別に示した。表から、最もプラス領域である割合が高い業種は「全般的な線の位置」「最終的な線の位置」ともに「管理的職業」であった。以下、「全般的な線の位置」では「専門的・技術的職業」「サービスの職業」が続いていた。また、「最終的な線の位置」では「事務的職業」「専門的・技術的職業」が続いていた。逆に、「生産工程・建設・軽作業などの仕事」は「全般的な線の位置」「最終的な線の位置」ともにプラス領域である割合が低いことが示された。

図表5-28には、現在の職業別に「曲線の波形」を示した。①「専門的・技術的職業」では「水平型」が多く「2次型」が少ない。②「管理的職業」では「1次型」が多く「水平型」が少ない。③「事務的職業」では「4次以上型」が多く「1次型」が少ない。④「販売の職業」では「2次型」が多い。⑤「生産工程・建設・軽作業などの仕事」では「水平型」「2次型」が多く「4次以上型」が少ない、などの特徴が示された。各職業ごとに特徴的な波形があることがうかがえる。

図表5-27 現在の職業別の

「全般的な線の位置」(左)と「最終的な線の位置」(右)のプラス領域の割合

	プラス		プラス
管理的職業	82.7%	管理的職業	79.2%
専門的・技術的職業	79.6%	事務的職業	75.3%
サービスの職業	79.2%	専門的・技術的職業	74.4%
販売の職業	77.6%	その他	70.8%
事務的職業	76.6%	サービスの職業	61.1%
その他	75.0%	運輸・通信の職業	61.0%
保安の職業	73.3%	保安の職業	60.0%
運輸・通信の職業	73.2%	販売の職業	57.9%
生産工程・建設・軽作業などの仕事	66.6%	生産工程・建設・軽作業などの仕事	55.3%

図表5-28 現在の職業別の「曲線の波形」

	専門的 技術的 職業	管理的 職業	事務的 職業	販売の 職業	サービ スの 職業	保安の 職業	運輸 通信 の職業	生産 工程 建設 軽作業 などの 仕事	その他	合計
水平	12.6%	4.5%	9.6%	5.6%	8.2%	13.3%	4.9%	14.8%	10.4%	9.6%
	2.4	-4.3	.0	-1.4	-.4	.7	-1.5	3.7	.2	
1次型	15.8%	19.9%	7.3%	8.4%	12.3%	6.7%	11.0%	10.2%	4.2%	13.2%
	1.9	5.0	-3.3	-1.5	-.2	-1.1	-.6	-1.9	-1.9	
2次型	16.0%	17.3%	16.2%	29.9%	24.7%	23.3%	22.0%	25.3%	16.7%	19.7%
	-2.2	-1.4	-1.7	2.7	1.1	.5	.5	3.0	-.5	
3次型	20.1%	24.0%	22.6%	25.2%	17.8%	20.0%	29.3%	24.2%	22.9%	22.9%
	-1.6	.7	-.1	.6	-1.1	-.4	1.4	.7	.0	
4次以上型	35.5%	34.3%	44.3%	30.8%	37.0%	36.7%	32.9%	25.5%	45.8%	34.7%
	.4	-.2	3.9	-.9	.4	.2	-.3	-4.1	1.6	
合計	437	467	314	107	73	30	82	364	48	1923

※上段は%、下段は標準化済み残差。

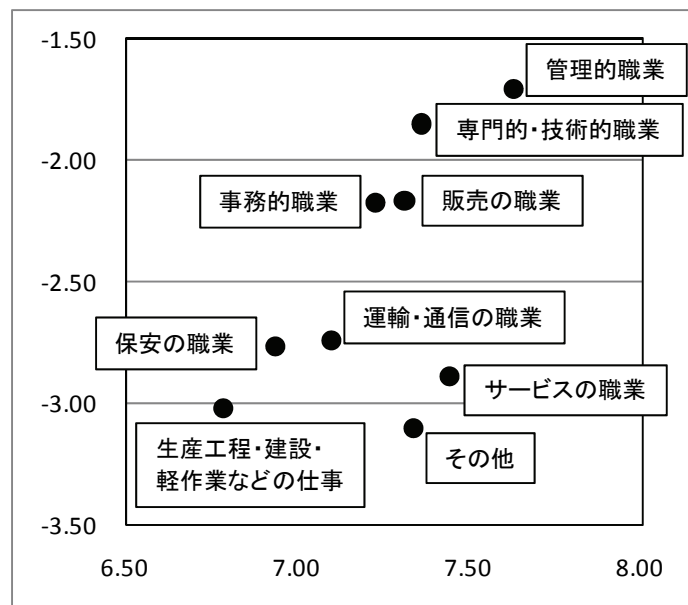
絶対値が1.96以上の場合、5%水準で統計的に有意。網掛けを付した。

図表5-29には、現在の職業別に「最高点の年齢」および「最低点の年齢」を順に並べた。「最高点の年齢」が最も高いのは、現在「管理的職業」の者であり、以下、「専門的・技術的職業」「サービスの職業」が続いている。一方で、「最高点の年齢」が最も若いのは「生産工程・建設・軽作業などの仕事」であった。また、「最高点の年齢」が最も高いのは「サービスの職業」であり、以下、「保安の職業」「生産工程・建設・軽作業などの仕事」が続いていた。逆に「最高点の年齢」が最も若いのは「管理的職業」であった。「管理的職業」「専門的職業」では最低点の年齢の方が若い、最高点が後の年齢になるのが特徴であった。逆に、「サービスの職業」「保安の職業」「生産工程・建設・軽作業などの仕事」では最高点の年齢の方が若く、最低点が後の年齢になるのが特徴となっていた。

図表5-29 現在の職業別の「最高点の年齢」および「最低点の年齢」

	最高点の 年齢		最低点の 年齢
管理的職業	42.5歳	サービスの職業	43.3歳
専門的・技術的職業	40.0歳	保安の職業	42.2歳
サービスの職業	39.6歳	生産工程・建設・軽作業などの仕事	40.3歳
販売の職業	38.9歳	販売の職業	40.0歳
その他	38.6歳	運輸・通信の職業	39.4歳
保安の職業	38.5歳	その他	39.0歳
運輸・通信の職業	38.5歳	事務的職業	39.0歳
事務的職業	37.9歳	専門的・技術的職業	37.4歳
生産工程・建設・軽作業などの仕事	37.6歳	管理的職業	36.6歳

図表5-30には、最高点の評定値を横軸、最低点の評定値を縦軸としたグラフに、現在の職業別の平均値を布置したものである。基本的には「最高点の評定値」が高ければ、「最低点の評定値」も高いという関係がみられる。ただし、一部、「サービスの職業」「その他」では、「最低点の評定値」は低いものの、若干「最高点の評定値」が高いという関係がみられた。

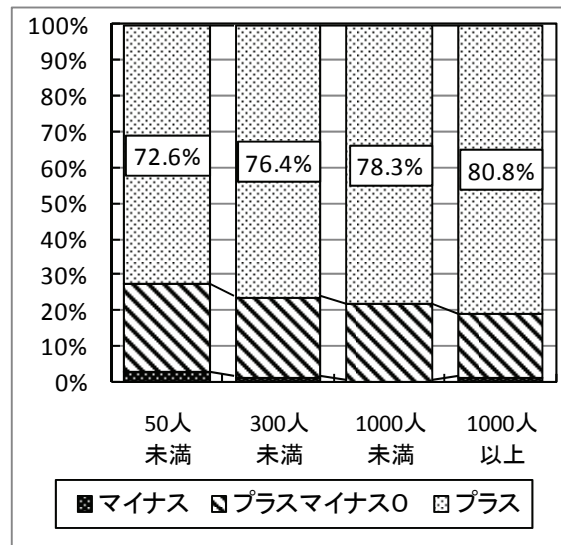


図表5-30 現在の職業別の「最高点の評定値」(横軸)および「最低点の評定値」(縦軸)

(4)現在の勤務先の従業員数別の各指標の傾向

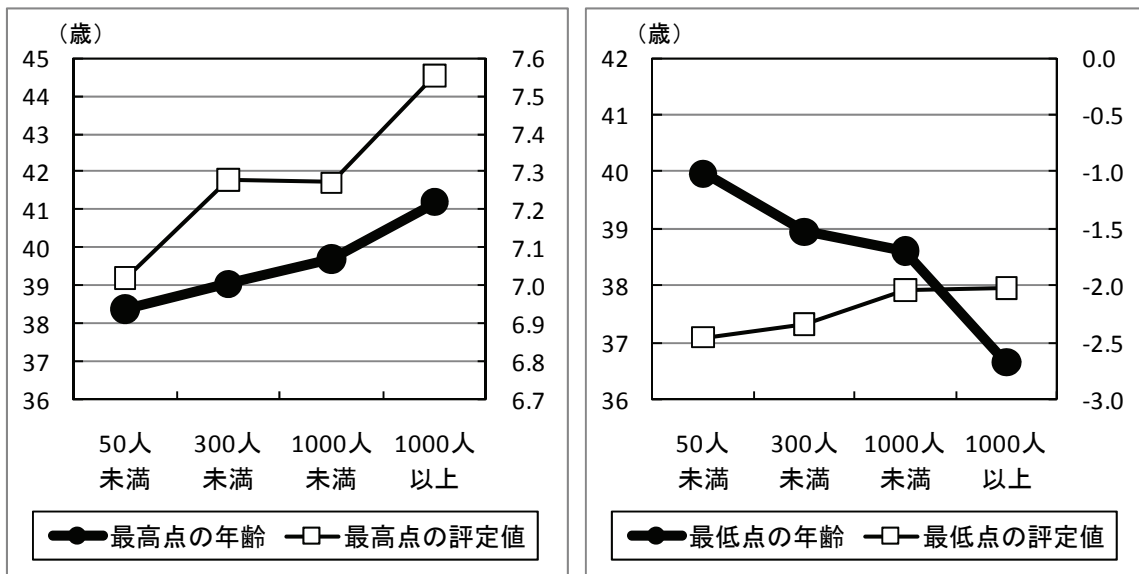
現在の勤務先の従業員数別に各指標の傾向を検討した結果、「全般的な線の位置」「最高点の年齢・評定値」「最低点の年齢・評定値」で統計的に有意な顕著な結果がみられた。

図表5-31に示したとおり、現在の勤務先の従業員数が多いほど、「全般的な線の位置」がプラス領域である者の割合は多かった。



図表5-31 現在の勤務先の従業員数別の「全般的な線の位置」

図表5-32に示したとおり、現在の勤務先の従業員数が多いほど、「最高点の年齢」は高く、「最高点の評定値」も高かった。一方、現在の勤務先の従業員数が多いほど、「最低点の年齢」は高く、「最低点の評定値」は高かった。これらの結果を言い換えると、現在の勤務先の従業員数が多いほど若いうちに最低点が観察され、その値もそれほど低くなく、その後、少し年をとってから最高点が観察され、その値は高いということが言える。逆に、現在の勤務先の従業員数が少ないほど、若い内に最高点を迎え、その評定値はあまり高くなく、その後、または同時期に最低点を迎え、その評定値は低いという結果が示されたと言える。



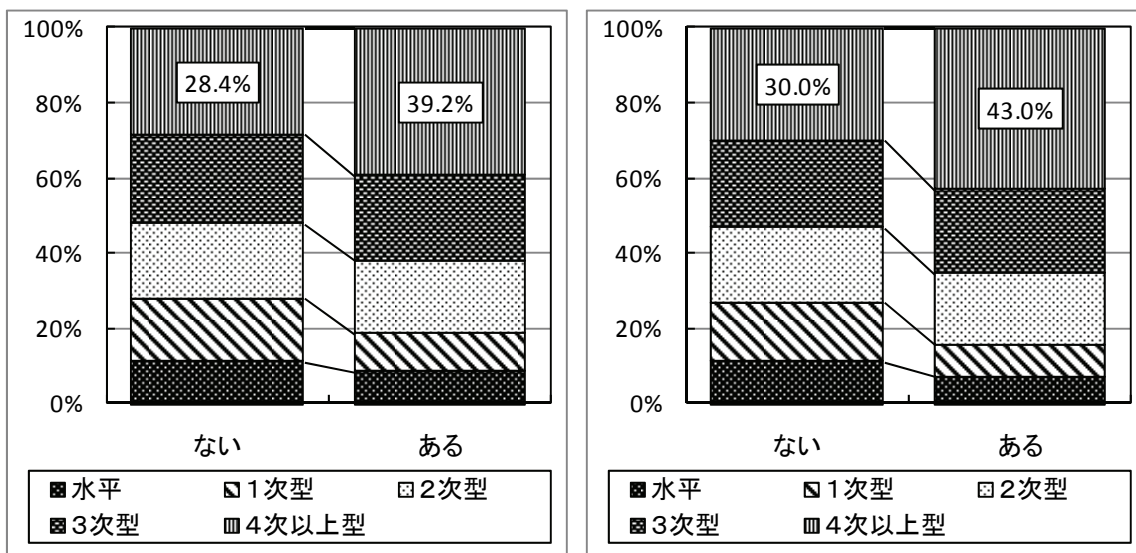
図表5-32 現在の勤務先の従業員数別の「最高点の年齢・最高点の評定値」(左)と「最低点の年齢・最低点の評定値」(右)

8. 転職経験または失業・休職経験別の各指標の傾向

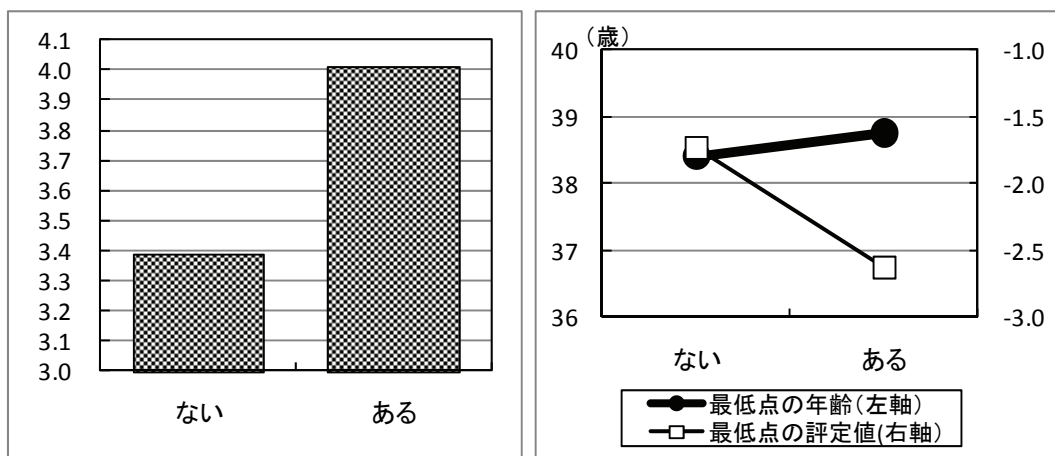
回答者の転職経験の有無および失業・休職経験の有無別に各指標の傾向を検討した結果、「曲線の波形」「屈曲点の数」「最低点の年齢・評定値」で統計的に有意な顕著な結果がみられた。

図表5-33に示したとおり、転職経験、失業・休業経験のどちらの場合でも、それらの経験がある方が「4次以上型」の複雑な波形を示す割合が多かった。

また、図表5-34左に示したとおり、転職経験がある回答者の方が「屈曲点の数」は多かった。さらに、転職経験がある回答者では転職経験がない回答者と比べた場合、「最低点の年齢」に大きな違いはないが、転職経験がある者の方が「最低点の評定値」は低かった。転職等の経験がおもに波形を複雑に、屈曲点の数を多くし、最低点の評定値を低めていることが推察される。



図表5-33 転職経験の有無別(左)および失業・休職経験の有無別(右)の「曲線の波形」



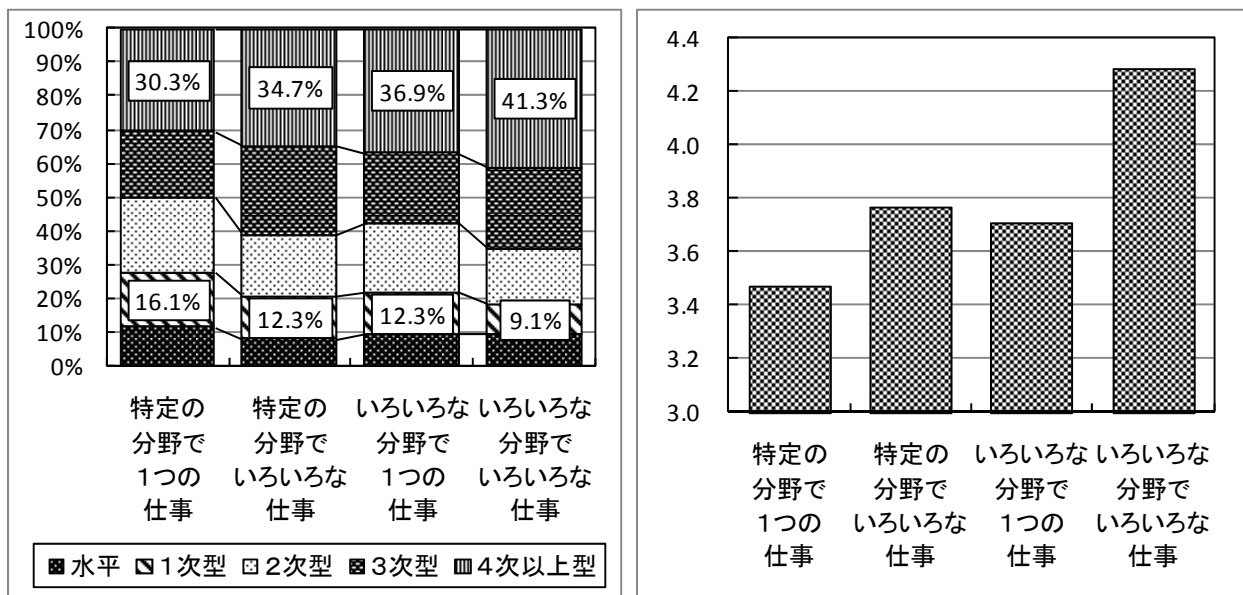
図表5-34 転職経験の有無別の「屈曲点の数」(左)および「最低点の年齢・最低点の評定値」(右)

9. これまでのキャリアに対する意識別の各指標の傾向

(1) 職業的経験の自己評価別の各指標の傾向

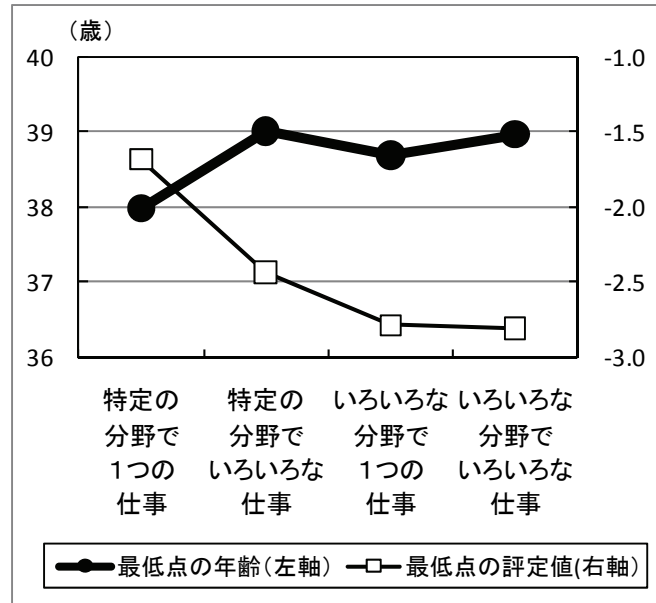
職業的経験の自己評価別に各指標の傾向を検討した結果、「曲線の波形」「屈曲点の数」「最低点の年齢・評定値」で統計的に有意な顕著な結果がみられた。

図表5-35に示したとおり、「特定の分野で1つの仕事」<「特定の分野でいろいろな仕事」<「いろいろな分野で1つの仕事」<「いろいろな分野でいろいろな仕事」のように、狭い分野で1つの仕事から広い分野で複数の仕事を体験したと自己評価する回答者ほど、「4次以上型」などの複雑な波形を示す者の割合が増え、「1次型」のような単純な波形を示す者の割合が少なくなっていた。また、それと伴って「屈曲点の数」も、おおむね「特定の分野で1つの仕事」<「特定の分野でいろいろな仕事」≒「いろいろな分野で1つの仕事」<「いろいろな分野でいろいろな仕事」の順で増えていた。いろいろな分野でいろいろな仕事を行ったという自己認識がある者ほど、自らのキャリアを複雑な曲線で描く傾向があることが示されたと言えよう。



図表5-35 これまでの職業経験に対する自己評価別に見た「曲線の波形」(左)と「屈曲点の数」(右)

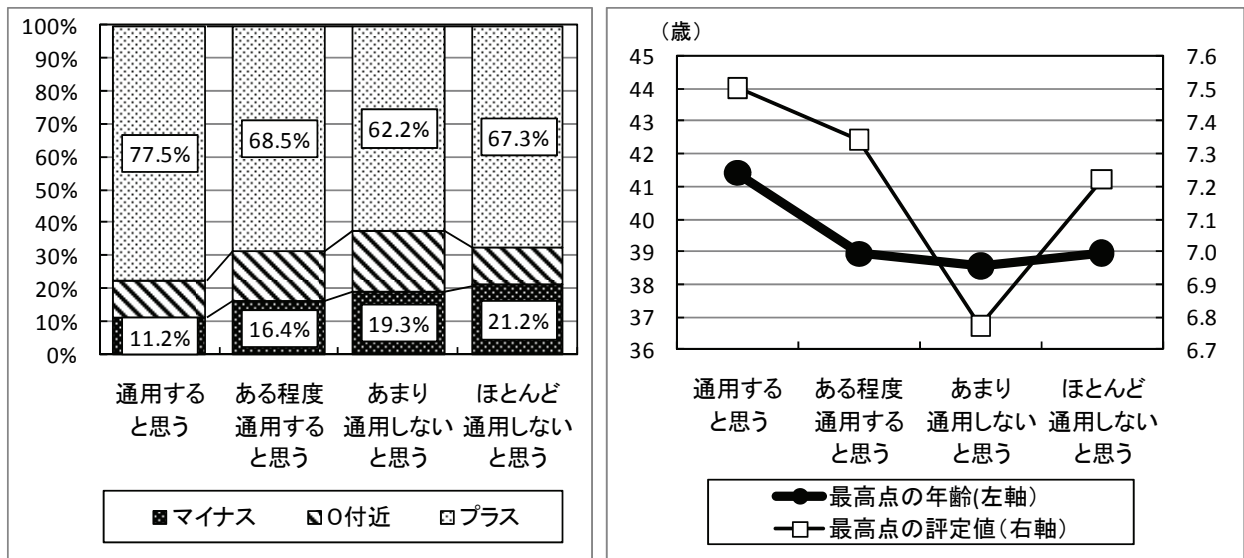
図表5-36に示したとおり、職業的経験の自己評価で「最低点の年齢」にあまり違いはみられなかったが、「最低点の評定値」では若干の違いがみられた。「特定の分野で1つの仕事」をしてきたと自己評価する回答者は「最低点の評定値」が高いことが分かる。狭い範囲で特定の仕事をしてきた者の方が、自らのキャリアで最も悪かった時期をそれほどネガティブには評価しない傾向があることがうかがえる。



図表5-36 これまでの職業経験に対する自己評価別にみた「最低点の年齢・最低点の評定値」

(2) 職業的能力の自己評価別の各指標の傾向

職業的能力の自己評価別に各指標の傾向を検討した結果、「最終的な線の位置」「最高点の年齢・最高点の評定値」で統計的に有意な顕著な結果がみられた。



図表5-37 自分の職業能力が他社で通用すると思うかに対する自己評価別にみた「最終的な線の位置」(左)および「最高点の年齢・最高点の評定値」(右)

図表5-37に示したとおり、自分の職業能力が他社でも「通用すると思う」回答者ほど、「最終的な線の位置」が「プラス」である者が多かった。また、「最高点の年齢」も「最高

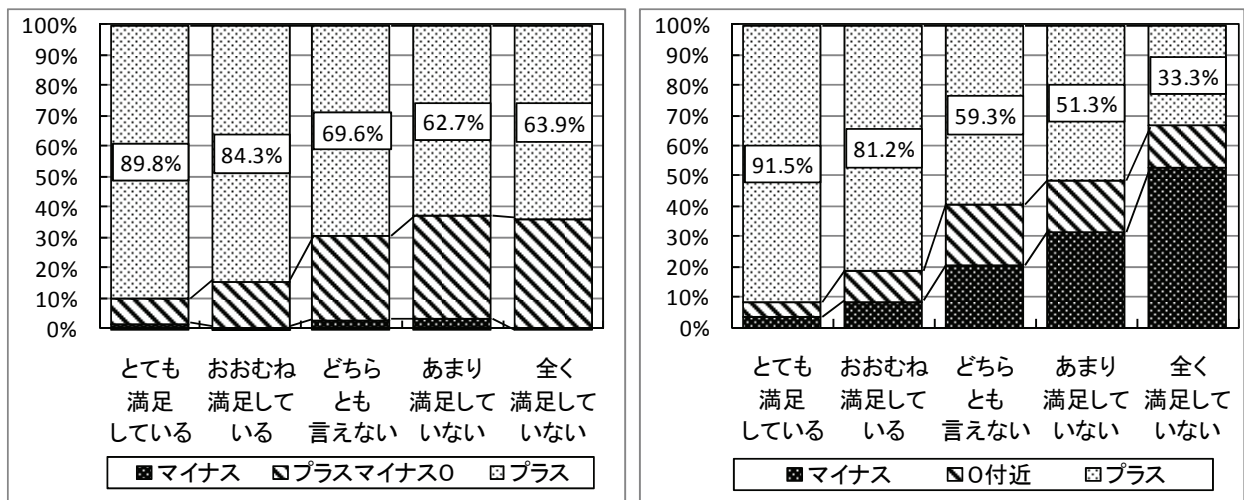
点の評定値」も高かった。本調査の回答者の年代である 50 代に他社で通用する職業能力を身につけているという自己認識が、線の計上に現れ出ることが示された。なお、「最高点の評定値」は、自分の職業能力が他社で「ほとんど通用しないと思う」回答者の方が、「あまり通用しないと思う」回答者よりも高かった。この背景については、本調査の結果にみからは不明だが、今後の研究課題としたい。

(3)これまでのキャリアに対する満足感別の各指標の傾向

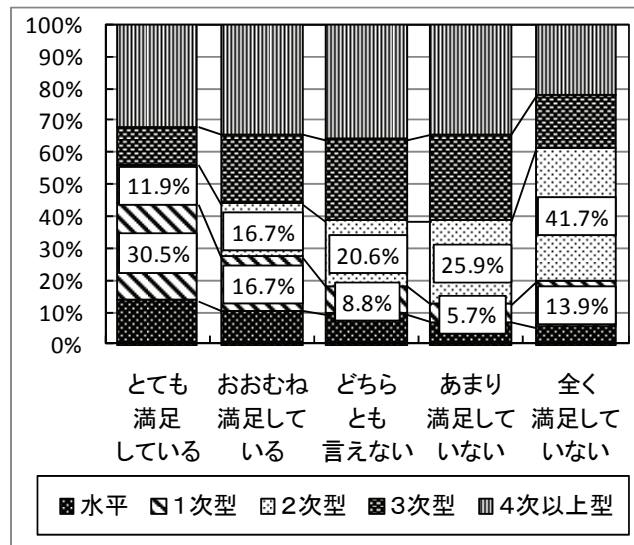
これまでのキャリアに対する満足感別に各指標の傾向を検討した結果、「全般的な線の位置」「最終的な線の位置」「曲線の波形」「最高点の年齢・最高点の評定値」「最低点の年齢・最低点の評定値」で統計的に有意な顕著な結果がみられた。概して、本章で検討している各指標は、これまでのキャリアに対する満足度と密接に関連することが示された。

図表 5-38 に示したとおり、「全般的な線の位置」「最終的な線の位置」ともに、満足感が高いほど「プラス」の者が多く、満足感が低いほど「マイナス」の者が多かった。

図表 5-39 には、これまでのキャリアに対する満足感別にみた「曲線の波形」の割合を示した。「とても満足している」から「全く満足していない」に至るほど、概して「2次型」の曲線を描く者が多く、「3次型」の曲線を描く者が少ないことが示された。「2次型」の曲線は（特に凸型の場合）、過去に自らのキャリア上のピークがあったが現在はその当時より落ち込んでいるという回答者の認識を反映していることが推測される。それに対して、「3次型」は一度ピークがあり、一度谷の時期があったものの現在は復活しているという回答者の認識を反映していることが多いと推測される。こうした回答者の感じ方がグラフに現れているものと解釈される。

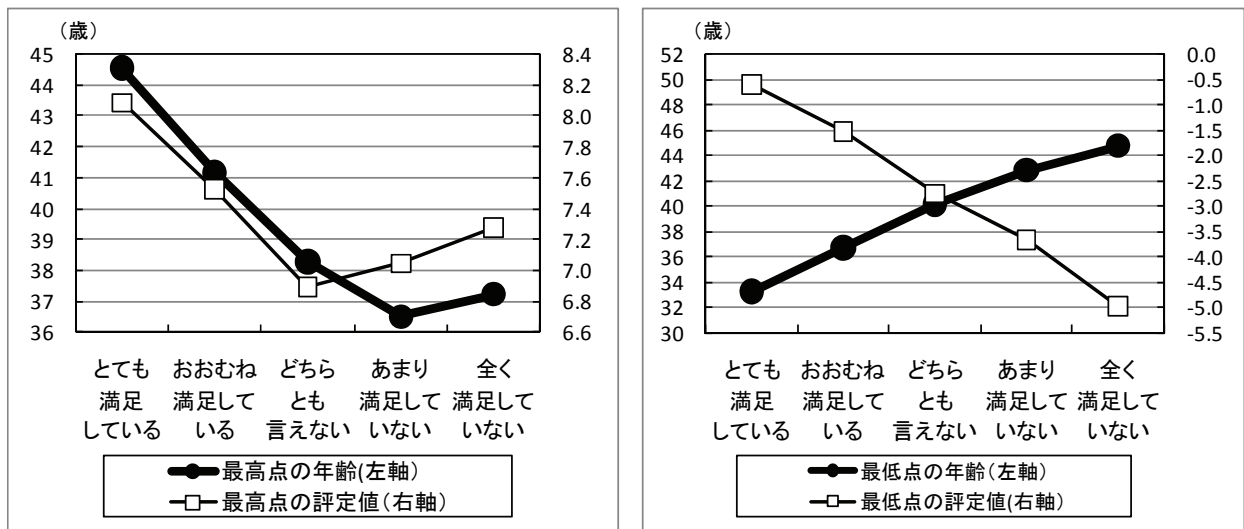


図表5-38 これまでのキャリアに対する満足感別にみた「全般的な線の位置」(左)および「最終的な線の位置」(右)



図表5-39 これまでのキャリアに対する満足感別にみた「曲線の波形」

図表5-40には、これまでのキャリアに対する満足感別にみた「最高点の年齢・最高点の評定値」「最低点の年齢・最低点の評定値」を示した。最高点については、満足感が高いほど最高点が観察される年齢が高く、また、その値も高いことが示された。一方、最低点では、満足感が高いほど最低点が観察される年齢が若く、その値もそれほど低くないことが示された。概して、若いうちにあまり低くない最低点を迎え、年をとってから高い最高点を迎えると本人に認識されるキャリアが、これまでのキャリアに対する満足感の高さに結びつくという解釈ができるものと思われる。



図表5-40 これまでのキャリアに対する満足感別にみた「最高点の年齢・最高点の評定値」(左)と「最低点の年齢・最低点の評定値」(右)

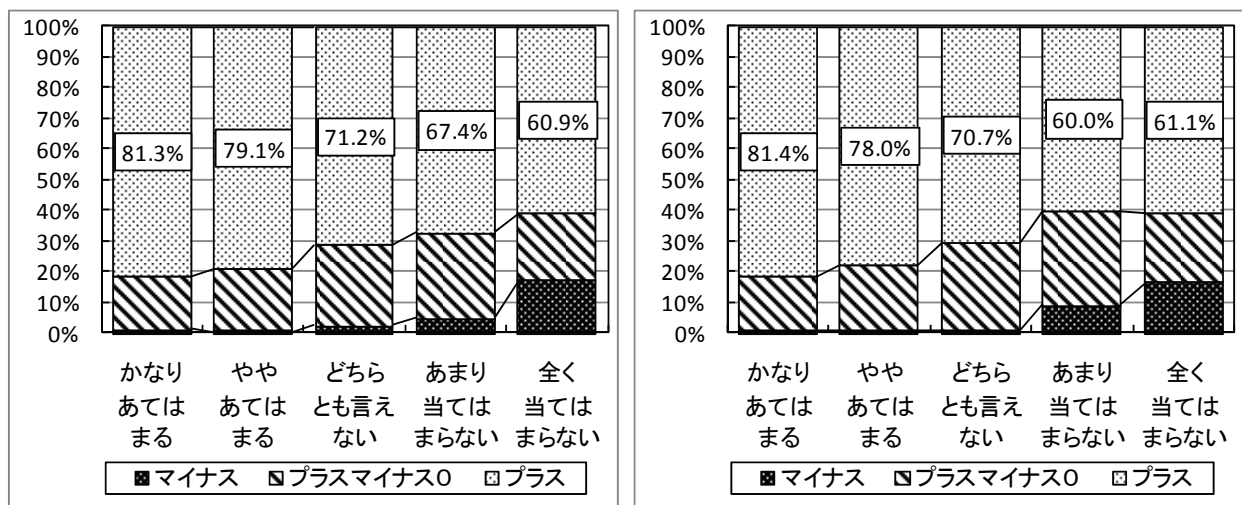
なお、最高点の評定値は、「どちらとも言えない」が最も低く、「あまり満足していない」

「全く満足していない」では若干高くなっている。これは、現状に満足していない回答者の中には過去に高い最高点があったという認識をもっている者が含まれていることによると思われる。いわば、落差が大きいため、現状により不満を感じるという背景があると推測される。

(4)これまでの人生に対する自己評価別の各指標の傾向

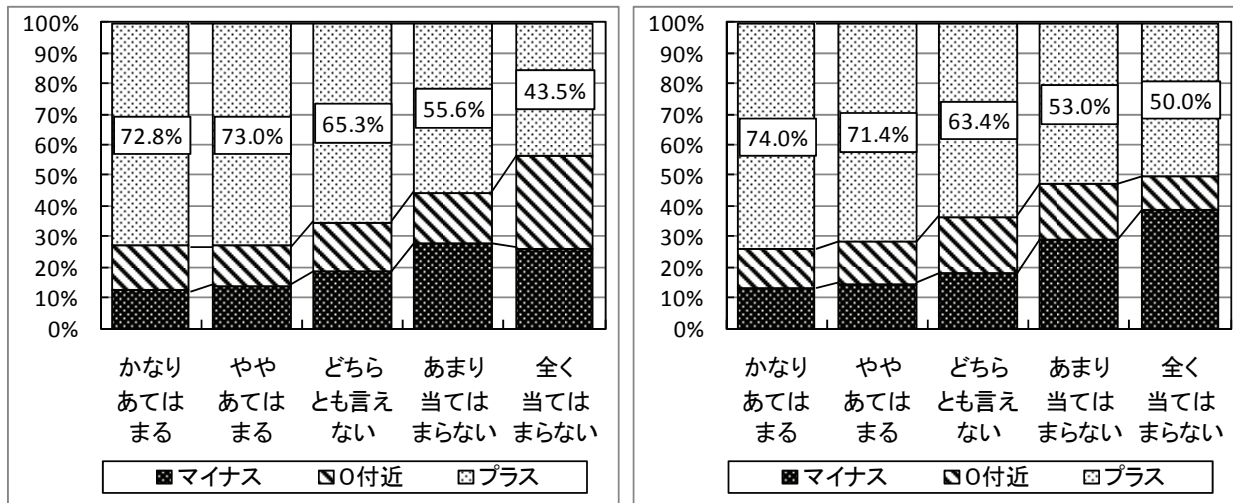
本調査では、これまでの人生に対する自己評価を、人生は「本人の能力で決まる」「本人の努力で決まる」「周囲の環境で決まる」「運によって決まる」の4項目で評定してもらった。分析の結果、これら4項目のうち統計的に有意な結果が示されたのは、「本人の能力で決まる」と「本人の努力で決まる」の2項目であった。これら2項目の回答別に各指標の傾向を検討した結果、「全般的な線の位置」「最終的な線の位置」「最高点の年齢・最高点の評定値」「最低点の年齢・最低点の評定値」の全てで統計的に有意な顕著な結果がみられた。

図表5-41には、人生は「本人の能力で決まる」および「本人の努力で決まる」の2項目に対する回答別に「全般的な線の位置」を図示したものである。人生は能力で決まる、または人生は努力で決まると回答している者ほど、「全般的な線の位置」はプラスの者が多いことが示される。



図表5-41 「人生は能力で決まる」(左)および「人生は努力で決まる」(右)別にみた「全般的な線の位置」(右)

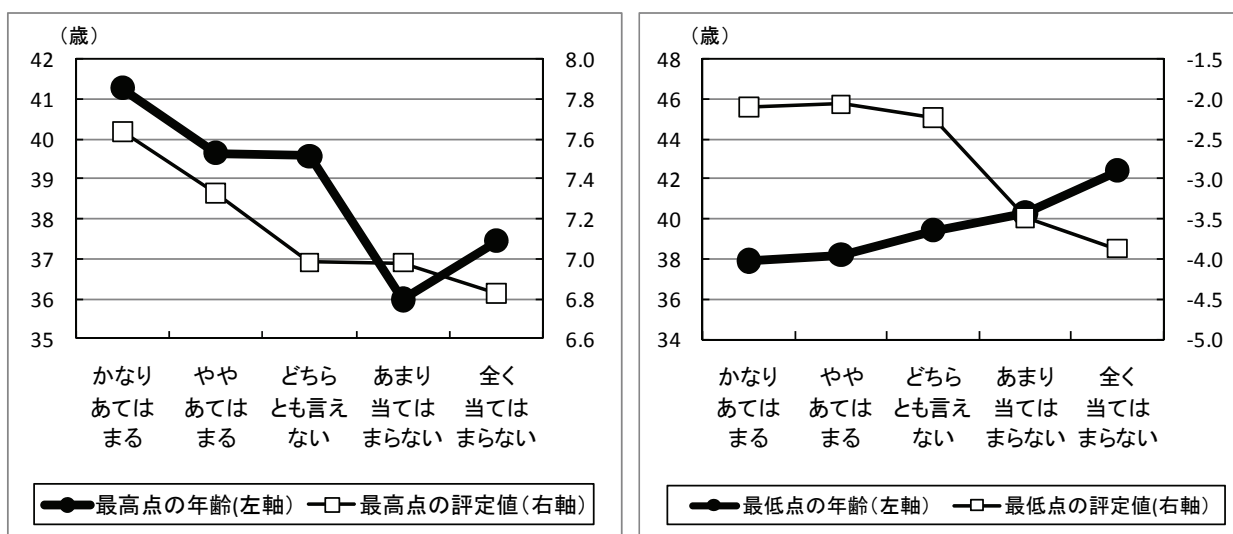
図表5-42は、人生は「本人の能力で決まる」および「本人の努力で決まる」の2項目に対する回答別に「最終的な線の位置」を図示したものである。人生は能力で決まる、または人生は努力で決まると回答している者ほど、「最終的な線の位置」もプラスの者が多いことが示される。



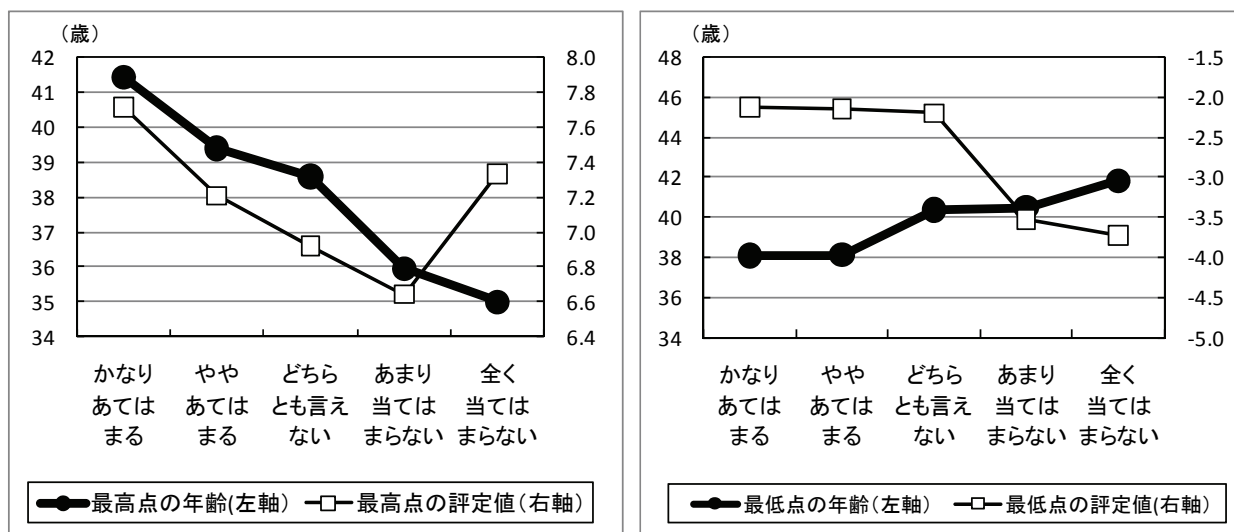
図表5-42 「人生は能力で決まる」(左)および「人生は努力で決まる」(右)別にみた「最終的な線の位置」(右)

図表5-43には、これまでの人生に対する自己評価「人生は能力で決まる」別にみた「最高点の年齢・最高点の評定値」「最低点の年齢・最低点の評定値」を示した。自己評価が高いほど最高点が観察される年齢が高く、また、その値も高かった。一方、自己評価が高いほど最低点が観察される年齢が若く、その値もそれほど低くなかった。こうした結果は、前節の「これまでのキャリアに対する満足感」に関する結果と類似のものであった。年をとってから高い最高点を迎えている回答者は、人生は自分の能力で決まると考える傾向があると解釈できる。

図表5-44のこれまでの人生に対する自己評価「人生は努力で決まる」別にみた結果も全く同じであった。



図表5-43 「人生は能力で決まる」別にみた「最高点の年齢・最高点の評定値」(左)と「最低点の年齢・最低点の評定値」(右)



図表5-44 「人生は努力で決まる」別に見た「最高点の年齢・最高点の評定値」(左)と「最低点の年齢・最低点の評定値」(右)

10. 本章のまとめ

図表5-45には、本章のまとめとして、ライフライン法の各指標と本章で検討した様々な要因との関連について、その概略をまとめた。図表5-45は多側面から解釈が可能であると思われるが、本章では、以下の3点に着目して整理したい。

(1)「全般的な線の位置」の解釈

第一に、「全般的な線の位置」を中心に「最高点の年齢・評定値」「最低点の年齢・評定値」と特に関連がみられる一群の要因がある。「性別」「現在の職業」「これまでのキャリアに対する満足感」「これまでの人生に対する自己評価」「現在の勤務先の従業員数」「最初の勤務先に対する満足感」などの要因である。これらの要因は、概して言えば、現在の収入・職業・勤務先とこれまでのキャリア・人生に対する評価の2つの側面に関する要因である。ライフラインがプラス領域とマイナス領域のどちらに描かれるかは、現在およびこれまでの職業生活をいかに評価するかということに関わると解釈できる。こうした解釈は、「全般的な線の位置」の指標の意味から言っても妥当であり、「全般的な線の位置」がどこにあるかを概観することは、ライフライン法を行う上で最も基本的な解釈となる。

なお、「全般的な線の位置」がプラス方向にある場合、「最高点の評定値」および「最低点の評定値」も高いことが一般的である。興味深いのは「全般的な線の位置」がプラス方向にある場合、「最高点の年齢」>「最低点の年齢」という関係がみられがちな点である。この点については様々な考察ができるが、端的に言えば、自らの職業生活を全般的に高く評価

図表5-45 ライフライン法の各指標と様々な要因との関連(簡略図)

	全般的な線の位置	最終的な線の位置	曲線の波形	屈曲点の数	最高点の年齢	最高点の評定値	最低点の年齢	最低点の評定値
性別	女性の方が+が多い	女性の方が+が多い	女性の方が複雑	女性が多い				
昨年1年間の収入	年収が高いほど+が多い	年収が高いほど+が多い	年収が高いほど1次型が多い	年収が高いほど多い	年収が高いほど高い	年収が高いほど高い	年収が高いほど若い	年収が高いほど高い
現在の職業	「管理的職業」「専門的・技術的職業」で+が多い	「管理的職業」「専門的・技術的職業」で+が多い	職業と、曲線の波形に関連がみられた		「管理的職業」「専門的・技術的職業」で高い	「管理的職業」「専門的・技術的職業」で高い	「管理的職業」「専門的・技術的職業」で若い	「管理的職業」「専門的・技術的職業」で高い
これまでのキャリアに対する満足感	満足しているほど+が多い	満足しているほど+が多い	満足していないほど2次型が多い		満足している方が高い	満足している方が高い	満足している方が若い	満足している方が高い
これまでの人生に対する自己評価	人生は能力または努力で決まると考える者ほど+が多い	人生は能力または努力で決まると考える者ほど+が多い			人生は能力または努力で決まると考える者ほど高い	人生は能力または努力で決まると考える者ほど高い	人生は能力または努力で決まると考える者ほど若い	人生は能力または努力で決まると考える者ほど高い
現在の勤務先の従業員数	従業員数が多いほど+が多い				従業員が多いほど高い	従業員数が多いほど高い	従業員が多いほど若い	従業員数が多いほど高い
最初の勤務先に対する満足感	満足していた方が+が多い							
学歴		中卒・高卒で+が少ない	中卒・高卒で1次型・2次型が多い	短大卒等で多い	中卒・高卒で若い	中卒・高卒で低い		
最初に勤め始めた年齢		18歳未満で+が少ない	18歳未満で2次型が多い		勤め始めが早いほど若い	勤め始めが18歳が最も低い		
現在の勤務先の業種		「教育、学習支援業」「医療、福祉」「公務」「金融・保険業」で+が多い	業種と、曲線の波形に関連がみられた		「教育、学習支援業」「公務」で高い			「教育、学習支援業」「公務」で高い
職業的能力の自己評価		他社でも通用すると思う者ほど+が多い			他社でも通用すると思う者ほど高い	他社でも通用すると思う者ほど高い		
配偶者の有無			配偶者無しの方が複雑	配偶者無しの方が多い				
入社の経緯			中途入社の方が複雑	中途入社の方が多い			新卒入社が若い	中途入社の方が高い
転職経験			転職経験ありの方が複雑	転職経験ありの方が多い				転職経験ありの方が低い
職業的経験の自己評価			複数の分野で複数の仕事を経験した者ほど複雑	複数の分野で複数の仕事を経験した者ほど多い				特定の分野で特定の仕事を経験した者は高い
失業・休職経験			失業・休職経験ありの方が複雑					
最初の勤務先の従業員数						従業員数が多いほど高い		

した回答者は、職業生活上の最低点を若い頃に向かえ、最高点を晩年に向かえたと考える場合が多いことを示す。このような結果がみられる理由として、人のキャリアは本来的に過去を振り返って回顧されるものであり、そのため現在の年齢に近づくにつれて上り調子になってくるように感じられるキャリアの方が、全般的な評価が高くなるためであると解釈される。すなわち、「全般的な線の位置」の高さは、若いうちに苦勞をして年をとってからピークを迎えるといったキャリア観と関連が深いことを示す。「若いうちの苦勞は買ってでもしろ」という諺言が人々に信じられやすい理由も、こうした点に根拠があると考えておくことができる。

また、女性は「全般的な線の位置」が高く、基本的に自らの職業生活をプラスに評定しがちである。この点については、女性全般の特徴であるのか、50代に就業者として働いている女性の特徴であるのかを、今後、慎重に検討していく必要がある。

(2)「最終的な線の位置」の解釈

第二に、「最終的な線の位置」と関連し、「全般的な線の位置」とは関連しない一群の要因がある。「学歴」「最初に勤め始めた年齢」「現在の勤務先の業種」「職業的能力の自己評価」などの要因である。これらの要因は「最高点の年齢」と密接に関連しており、「最低点の年齢」とは関連していないのも特徴である。これらの結果を総合的に解釈すると、学歴、および学歴と連動する勤め始めの年齢、さらには学歴によって緩やかに規定される勤務先の業種が、最高点を迎える年齢と関連しており、その結果が「最終的な線の位置」に象徴的に示されるということが言える。具体的には、最高点の年齢が高い業種は、おもに「教育、学習支援業」と「公務」であり、これらの業種の中心を占める教員・公務員は、基本的に大卒（一部、高卒）以上の学歴を必須としており、そのため勤め始める年齢が高いという関係がある。これらの関係からは、「最終的な線の位置」はかなり現在の勤務先の特定の業種およびその業種に入職するために必須の学歴に依存する面があり、その点、慎重な解釈が求められる。

ただし、前節で取り上げた「性別」「現在の職業」「これまでのキャリアに対する満足感」「これまでの人生に対する自己評価」も、「最終的な線の位置」と密接に関連している。したがって、この指標が、自分の職業生活を振り返った場合の総合的な満足感と関連していることも明白である。なかでも「職業的能力の自己評価」は、前節の「全般的な線の位置」とは関連があまり見られず、「最終的な線の位置」とのみ強い関連がみられる。「職業的能力の自己評価」は「あなたの職業的な能力は、他社でも通用すると思いますか」という質問であったが、現在の自らの職業的能力に対する自己評価の高さは、「最終的な線の位置」と密接に関連するということと言える。

以上をまとめると、「最終的な線の位置」の指標については、業種や学歴などいくつかの点で慎重に解釈すべき点はあるものの、基本的には、それまでの職業生活に対する総合的な

評価が織り込まれている指標である。ただし、現時点での職業的能力の自己評価と明確な関連がみられる点は重視すべきであり、現時点での職業生活に対する自己評価を表す指標として解釈することが可能である。すなわち、「全般的な線の位置」と同じような解釈が可能である一方、現時点での自己評価とより密接に関連する指標であると言える。

(3)「曲線の波形」「屈曲点の数」の解釈

第三に、「全般的な線の位置」「最終的な線の位置」とは関連せず、おもに「曲線の波形」「屈曲点の数」と関連する一群の要因がある。「配偶者の有無」「入社の際緯」「転職経験」「職業的経験の自己評価」「失業・休業経験」などの要因である。これらの要因は、いずれも職業生活の分断と関連が深い要因である。転職経験や失業・休業経験は当然ながら、入社の際緯も中途入社の有無をたずねたものであり、職業生活がどこかで分断したか否かを示す要因となっている。また、本調査においては、配偶者の有無も、転職経験や失業・休業経験と関わりの深い要因である。本調査の回答者は全員50代であったが、現在、配偶者がいないと回答した約7%の回答者のうち約8割が女性であった。すなわち、50代の調査時点で配偶者がいない就労者とはおおむね女性であり、その背景には、途中で配偶者と離死別した場合などのような複雑な婚姻事情が関わるものと推察される。結果的に、職業生活が様々な形で分断されやすくなり、結果として「曲線の波形」「屈曲点の数」の指標と関連がみられたものと考えら得る。

以上のように、「曲線の波形」「屈曲点の数」の指標は、基本的には、回答者の職業生活がいかに波瀾万丈であったかを示す指標として解釈することができると言えよう。

なお、「曲線の波形」「屈曲点の数」と関連の深い「入社の際緯」「転職経験」「職業的経験の自己評価」の各要因は、「最低点の評定値」とも関連が深いという特徴がある。これらの要因は各人の職業生活がいかに波瀾に満ちたものであるかに関する要因であると同時に、自らの職業生活上、最低な時期を各人が思い出した際の評価の低さとも関連している。すなわち、中途入社や転職をし、特定の分野で特定の仕事をしてきたという継続性が実感できない場合、「曲線の波形」は複雑になり、「屈曲点の数」も多くなるが、その背景に、自らの職業生活の最低な時期をより低く評価せざるをえない各人の職業生活上の出来事が伏在していたと解釈することができるであろう。